

2006 年度

# 夏季日本語教育実習報告書

2006 年度日本語教育実習生

田中典子

中島忍

服部明子

許惠雯

## 目次

表目次	5
第1章 概要	1
1.1 はじめに	1
1.2 実習の特徴	1
1.3 コース概要	2
1.3.1 クラス設定	2
1.3.2 日程	2
1.4 役割分担	3
1.5 実習全体の流れ	3
第2章 各係の仕事	8
2.1 渉外(外部)	8
2.1.1 関係諸機関と連絡方法	8
2.1.2 渉外活動	9
2.1.3 対外文書	18
2.1.4 反省点	19
2.2 渉外(内部)	20
2.2.1 授業用の教室及び設備について	20
2.2.2 録音機器の確保について	21
2.2.3 Yahoo!グループの管理について	21
2.2.5 ティーパーティの教室について	22
2.3 WEB担当	23
2.3.1 2006年度夏季日本語教育実習のホームページ・WEBアンケートの作成	23
2.3.2 作成したホームページのサーバーへの接続作業	23
2.4 教材・備品・会計	24
2.4.1 教材	24
2.4.2 備品	25
2.4.3 会計	27
2.4.4 反省点	27
第3章 事前調査	28
3.1 事前調査実施の目的	28
3.2 第一段階の調査(WEBアンケート)について	28
3.2.1 アンケートの構成・内容	28
3.2.2 WEBアンケートの変更点	30

3.3	第二段階の調査(インタビュー)について	31
3.3.1	インタビュー調査の項目	32
3.3.2	インタビュー結果から	33
3.4	事前調査の反省点	34
第4章	クラス概要	35
4.1	はじめに	35
4.2	Aクラス概要	35
4.2.1	担当実習生	35
4.2.2	クラス目標	35
4.2.3	学習者	36
4.2.4	学習者のニーズ・レディネス	37
4.2.5	シラバス	38
4.2.6	テキスト	39
4.2.7	授業内容	39
4.2.7.1	2006年8月7日	39
4.2.7.2	2006年8月8日	41
4.2.7.3	2006年8月9日	46
4.2.7.4	2006年8月10日	48
4.2.8	Aクラス全体の反省	50
4.3	Bクラス	51
4.3.1	担当実習生	51
4.3.2	クラス目標	51
4.3.3	学習者	52
4.3.4	学習者のニーズ・レディネス	52
4.3.5	シラバス	54
4.3.6	テキスト編集	55
4.3.7	授業内容	55
4.3.7.1	2006年8月7日	55
4.3.7.2	2006年8月8日	58
4.3.7.3	2006年8月9日	62
4.3.7.4	2006年8月10日	66
4.3.8	Bクラス全体の反省	68
第5章	防災授業への取り組み	70
5.1	防災授業への取り組み	70
5.1.1	目的	70
5.2	具体的な取り組み	70

5.2.1	事前準備	70
5.2.2	防災授業：8月10(木)3限	71
5.2.3	防災センターツアー：8月11日(金)	72
5.3	学習者の反応	72
5.3.1	アンケート結果	72
5.3.1.1	事前アンケート	72
5.3.1.2	事後アンケート	75
5.3.2	考察	76
5.3.3	防災センター見学後インタビュー	77
5.4	まとめ	77
第6章	事後アンケート	79
6.1	事後アンケート結果	79
6.2	まとめと反省	83
第7章	まとめ	84

## 表目次

表 1	クラス編成	2
表 2	スケジュール	2
表 3	教材リスト	24
表 4	在庫備品リスト	25
表 5	2006 年度購入した備品	26
表 6	収支明細	27
表 7	Aクラス学習者プロフィール	36
表 8	Aクラス：ニーズレディネス表	37
表 9	Bクラス学習者プロフィール	52
表 10	Bクラス：ニーズレディネス表	53
表 11	事前アンケート結果	74
表 12	授業後アンケート結果	75

# 第1章 概要

## 1.1 はじめに

本実習（名古屋大学夏季日本語教育実習）は学習者募集からコースデザイン、実際の授業までを実習者が行う。

今回学習者として参加していただいたのはJETプログラム<sup>1</sup>のもと、名古屋市の中学校・高等学校で勤務する外国語指導助手（Assistant Language Teacher、以下ALT）の方々である。JETプログラムを管轄する名古屋市教育委員会には1989年より学習者募集の際、全面的な協力をいただいている。今回は同委員会に加え、ALTを派遣する民間派遣会社2社（株式会社アルティアセントラル・コスモグローバルコミュニケーションズスクール）に多大なご協力をいただき、実習実現の運びとなった。

## 1.2 実習の特徴

本実習の特徴を以下に述べる。

- (1)期間 : 短期集中コースである
- (2)参加者共通属性 : ①英語母語話者  
②職種が同じ（ALT）  
③日本滞在歴1年以上
- (3)教材を自主作成 : 学習者レベルに合わせ実習者が作成する
- (4)教授形態 : ①原則としてすべてのレベルの学習者に直接法で指導する  
②チームティーチングを行う

(1)に関してはALT自主参加のため、彼らの夏季休暇期間にあわせてコース参加募集時に候補を3つ挙げ、参加者が最も多い期間に設定した。各授業の関連性を高めるため、かつ参加意欲を維持する目的で4日間プラスオプションツアー1日の短期集中コースとした。

(2)の特徴はコースデザインをする際の主要要因であるが、特に例年と異なる属性は③の日本滞在歴である。本年度は名古屋市教育委員会においてJETプログラムALTの新規採用がなかったため、学習者募集の開始時期、方法が例年とは大きく異なった。

(3)当該コースは学習者が求める授業を模索し提供するケーススタディーである。そのた

---

<sup>1</sup> JETプログラムとは、「語学指導等を行う外国語青年招致事業」(The Japan Exchange and Teaching Programme)の略称で、本年度で開始20年目を迎える。総務省、外務省、文部科学省及び財団法人自治体国際化協会（CLAIR）の下に名古屋では名古屋市教育委員会がこれを担当

め、ニーズ分析に基づいたシラバスデザインおよび教材作成を目的とするため、実習生自身でこれを作成した。使用教材については4章で詳述する。

(4)4日間すべての授業を一貫性のあるものにするため、各レベル毎に担当者を固定した。英語を媒介語で使うのは語彙の言い換え程度にとどめ、直接法で指導した。

### 1.3 コース概要

#### 1.3.1 クラス設定

WEB アンケート、インタビューの2つの事前調査（第3章詳述）の結果、AクラスとBクラスの2つのコースを設定することにした。以下に担当者とクラス構成を記す。

表 1 クラス編成

クラス	担当	人数	出身構成 ( )内は人数
A	田中典子、服部明子	4名	カナダ(1) アメリカ(3)
B	中島忍、許恵雯	5名	イギリス(2) アメリカ(2) カナダ(1)

#### 1.3.2 日程

2006年8月7日(月)から8月10日(木)の4日間は正規授業、8月11日(金)にオプションコースとして名古屋市港区の防災センター訪問を企画した。なお、今回は新しい試みとして8月10日3時限の授業・オプションコースの連続で「防災授業」を取り入れた。動機・経緯については1.4で、内容については5章で詳述する。また、要望が多かった能力試験対策などには個別に対応するために、授業後 Free Question Time を設定した。

表 2 スケジュール

	8月7日(月)	8月8日(火)	8月9日(水)	8月10日(木)
1限 70分	オリエンテーション※	授業	授業	授業
2限 70分	授業	授業	授業	授業
3限 90分	授業	授業	授業	防災授業※

※印は合同授業

教室：609教室と612教室を使用。

オリエンテーション、防災授業の合同授業は609教室で行った。

<報告担当 1.1~1.3 田中典子>

## 1.4 役割分担

4名の実習生で以下のように実習時の仕事を分担した。

- |            |      |
|------------|------|
| (1)渉外（外部）  | 田中典子 |
| (2)渉外（内部）  | 服部明子 |
| (3)WEB担当   | 中島忍  |
| (4)会計・備品管理 | 許惠雯  |

## 1.5 実習全体の流れ

以下、教育実習の準備段階から報告書の作成までの間に行ったミーティング及び活動について報告する。

**2006年4月24日(月)**

教育実習で何をめざすか、対象学習者をどのレベルに設定するかについて話し合った。また、コースデザインのため、WEBアンケート調査とインタビュー調査という2回の事前調査を行うことを決めた。

**2006年4月25日(火)**

2005年度夏季実習で実施されたアンケートを基に検討を加えた上で、アンケート項目を決定した。（具体的な内容は第3章で詳述）

**2006年4月26日(水)**

WEBアンケートを作成するため、2005年度夏季実習のWEBアンケート担当者に作成方法を教えていただいた。

**2006年5月2日(火)**

コース名及びコースの日程に三つの候補を出した。また、アンケートの一部を修正した。

**2006年5月9日(火)**

この日は以下の三点について話し合った。

- ・ 5月2日に出した三つの候補から最終コース名を NU Intensive Japanese Program に決定。
- ・ アンケートの最終確認。
- ・ 参加者募集告知の文書についての検討。

#### **2006年5月15日(月)**

2名の実習生が ALT のミーティングに参加し、教育実習のコースについて告知した。その際、5月9日に検討した参加者募集告知の文書を配布した。

#### **2006年5月23日(火)**

実習教材を作成するため、参考になる書籍の購入について検討した。

#### **2006年5月29日(月)**

5月23日に話し合った購入希望の書籍を注文した。(購入した書籍の詳細は 2.4 で詳述)

#### **2006年6月12日(月)午前**

コースの目標設定、学習者のレベルとクラス分けについてや、どのような技能をどのように取り上げるかなどについて話し合った。その上で、午後を実施するインタビューのため、質問項目について話し合い、インタビューシートを作成した。

#### **2006年6月12日(月)午後**

ALT の参加希望者 5 名に対し、彼らのミーティング場所に出向き、インタビューを行った。

#### **2006年6月26日(月)午前**

6月12日の午後に行った ALT に対するインタビューの質問項目を見直し、気づいたことを出し合った。インタビューシートの修正を行い、前回の不備を改良した。参加希望者の都合を分かりやすく聞くため、カレンダーを作成した。さらに、インタビューの際に必要なフェイスシートを作成した。フェイスシートは WEB アンケートの回答をまとめたも

のである。

#### **2006年6月26日(月)午後**

(株)アルティアセントラルの参加希望者9名に対し、彼らのミーティング場所に出向き、インタビューを行った。

#### **2006年6月28日(水)**

コスモの参加希望者1名に対し、コスモの会社本部でインタビューを行った。

#### **2006年7月3日(月)**

参加希望者全員のインタビューの結果に基づき、以下の事項について話し合った。

- ・ コースの開講日の決定：8/7(月)、8/8(火)、8/9(水)、8/10(木)
  - ・ コースデザイン：コースの目標設定、開講レベルとクラス数、1コマの授業の時間、シラバスデザイン
  - ・ 防災授業とオプションルツアーの取り組み<sup>2</sup>
- また、実習で使用する備品を確認し、購入備品を決定した。

#### **2006年7月4日(火)**

7月3日に検討した備品を購入した。(購入した備品リストは2.4を参照)

#### **2006年7月14日(金)**

7月3日に話し合ったコースデザイン、クラス分け、教材、シラバスについての実習計画をより具体的に検討した。

#### **2006年7月21日(金)**

---

<sup>2</sup> 実習コースは日本語能力を伸ばすことだけでなく、日本で生活する上で必要となる知識も指導できればと考え、防災授業に取り組むことにした。そして、開講日の翌日(8/11)にオプションルツアーを設定することにした。(詳細は第5章で詳述)

ここまで話し合ったことを基に、以下の事項を決定した。

- ・ 開講クラスは上級クラスと初級クラスの2つにすること
- ・ 1つのクラスは2名の実習生が担当すること
- ・ 授業一日のコマ数と時間
- ・ 授業後の1時間を「Free Question Time」として設定すること
- ・ コースの内容、到達目標、シラバスなど
- ・ 防災授業の準備

#### **2006年7月25日(火)**

7月4日に購入した備品に不足があることが判明したため、購入備品について再検討した。

#### **2006年7月27日(木)**

防災の基礎知識などを取り入れた日本語授業を行う前段階として、実習生自身が防災の知識を学ばなければならないと考え、名古屋大学にある災害対策室の講義を受けた。

#### **2006年7月28日(金)**

7月25日に再検討した備品を購入した。(購入した備品リストは2.4を参照)

#### **2006年8月1日(火)**

防災授業では災害伝言ダイヤルの利用方法を紹介するため、試験的に利用できるこの日に実習生がアクセスし、伝言を録音、音声データを作った。

#### **2006年8月7日(月)、8月8日(火)、8月9日(水)、8月10日(木)**

コースの実施。

#### **2006年8月11日(金)**

オプションツアーとして、実習生4名と学習者6名が名古屋市港区の防災センターに行った<sup>3</sup>。

---

<sup>3</sup> オプションツアーは自由参加のため、学習者は全員ではない。

**2007年1月12日(金)**

2006年度の夏季教育実習を終え、実習報告書を作成するためにミーティングを開き、報告書の構成及び執筆担当を決定した。

**2007年1月23日(火)**

1月12日に決めた各執筆担当部分を出し合い、加筆・修正箇所について検討した。

**2007年2月16日(金)**

1月23日に検討した各執筆担当部分を出し合い、加筆・修正箇所について再検討した。

**2007年2月22日(木)**

2月16日に検討した各執筆担当部分を出し合い、加筆・修正箇所について再検討した。

<報告担当 1.5 許惠雯>

## 第2章 各係の仕事

### 2.1 渉外（外部）

渉外担当は、学外の機関との連絡を担当する。本実習では、学習者募集に際して、ALTを管轄する3機関との連絡を主に担当した。また、対外文書作成も担当した。以下に関係諸機関と仕事の経緯を報告する。

#### 2.1.1 関係諸機関と連絡方法

##### (1) 名古屋市教育委員会

第1章で報告したように名古屋市のJETプログラムを管轄する機関であり、市の中学校、高等学校すべてに派遣されているALTを把握している。名古屋市のALTはその所属が名古屋市教育委員会、あるいは民間の派遣会社とにわかれるが、プログラム全体を管轄するのは前者の機関であるため、本実習の最初の募集のお知らせは名古屋市教育委員会を通し、担当者の方にお問い合わせし一括で行っていただいた。

担当者の方との連絡方法は主に電話およびFAXである。電子メールは先方が活用されていない関係で使わなかった。また、第2・4月曜日にALTの方々のミーティングがあるのでALTの方への告知活動はそれを活用させていただいた。

##### (2) 株式会社アルティアセントラル

今回参加してくださったALTの方々のほとんどが所属していらっしゃる会社で、大変お世話になった。

連絡方法はメールが中心で、次に電話であった。社内的にはメーリングリストが完備されていて、ALTの方への最初の連絡はスーパーバイザーの方が英語で前文を付け加えてくださり、一斉に情報を流していただけリスポンスもはやかった。

##### (3) コスモグローバルコミュニケーションズスクール

日程が合わないということで最終的に1名の参加のみとなったが、ALTの方が所属されている会社の1つである。

連絡方法は初回は名古屋市教育委員会を通して書面で、それ以降は電話とメールで直接行った。

## 2.1.2 渉外活動

**2006年4月28日(金)**

渉外内容：名古屋市教育委員会 担当者の方（学校教育部指導室指導主事）に挨拶

渉外方法：電話

- ① 例年にならい、挨拶に伺う旨を伝えた。担当者の方は本実習のことについて熟知なされており、毎年のごとで内容についてもよくわかっているため、挨拶に伺う必要はないと事務処理軽減のご提案をしてくださった。
- ② WEBでアンケートをとることをお伝えしたところ、実習の趣旨とアンケート依頼の手紙の配布を申し出てくださった。JETのミーティングの日時および場所をお聞きし、後日英語の文書を人数分持参しうかがうことにした。文書の配布数の内訳は以下の通りである。
  - ・JET所属のALT 27名分（名古屋市教育委員会 JETのミーティング参加者）
  - ・民間所属のALT 91名分（民間派遣会社 3社合計）
- ③ 実習を7月の最終週に設定しているとお伝えすると、7月20日が1学期の修了式なので、7月21日から夏休みに入ること、せっかくアンケートをとるなら、開講期間についても希望をとってはどうかとのご提案をいただいた。

この電話の後、実習生全体で話し合いの時間をもち、以下のことを決定した。

-----

- 1) 担当氏の提案③を検討し、アンケートに参加者のスケジュールを聞く項目を追加することにした。これにより、日程は固定ではなく、選択式にし、最も参加者の多いスケジュールにするという最終的なスタイルが決まった。
- 2) 訪問日時が決まったので、WEBにアンケートをアップロードする日付もそれに合わせることに決定した。スケジュール的にはかなりきつかった。詳細は係りの報告2.3を参照されたい。
- 3) 5月15日に持参する手紙を和文、英文両方で用意することにした。英文手紙については、本研究科の英語母語話者に翻訳をお願いした。

**2006年5月15日（月）**

渉外内容：名古屋市教育委員会所属 ALT への教育実習コースの告知と参加者募集およびニーズ調査のためのアンケート依頼

渉外方法：JET ミーティング場所の名古屋市教育館（栄）を訪問

### 1) 1階講師控え室にて担当者にあいさつ、名刺交換

実習生（田中・服部）2名で訪問し、当日のミーティングについて担当者の方と打ち合わせをする。民間派遣 ALT の方への手紙一式も同時にお渡しして連絡仲介について確認、お願いをする。

持参書類：名古屋市教育委員会・民間派遣会社所属の ALT 双方に渡す手紙

日本語版は各窓口の担当者用に4部、英語版は ALT 用 118部（4機関合計）

### 2) ミーティングに参加

時間：15:00～15:30

場所：名古屋市教育館3階

月2回月曜日に上記の場所で実施されるミーティングには名古屋市教育委員会所属の ALT のみ参加する。当日は27名全員出席していて、机の上には名札が置いてあった。ミーティングは ALT の自主運営で代表1名が議長で前に座り、会を進めていた。その横には担当者が座られ、随時補足されていた。教室形式の着席だが、発言は自由で、リラックスした感じで会議はすべて英語であった。教育委員会側からは国際理解指導員の方々も参加されていた。

この日のミーティング項目がすべて終わった後、担当者から実習生が紹介され、時間を5分ほどいただき実習への参加協力依頼とニーズ調査協力依頼をした。

**配布資料**：英語の手紙3枚（趣旨とアンケート内容、コースについて書いたもの）

20部配布<sup>4</sup>

**説明**：田中が英語で行った。服部が資料配布を担当した。

- ・ 実習生の簡単な自己紹介
- ・ 本日もここへ来た目的（参加者募集とアンケートのお願い）
- ・ コースについて

---

<sup>4</sup> 手紙は27名からもうすぐ帰国する7名の方をのぞいて配布することになった。

**質疑応答：**

Q1 去年も参加されていた方から時間について朝からかという質問あり。

A1 時間はまだ決めていないが、午前中から3時までを予定していると答えた。

Q2 もう一人積極的な女性より開講期間について確認の質問あり。

A2 7月21日から8月31日までの間で行うと言ったつもりが、夏休み毎日やるように理解されていた。集中式で4日間のみと答えたら、それなら大丈夫とのことだった。

最後に担当者が今の時点で参加する意志がある人をたずねてくださったところ、5人ぐらいが挙手してくださった。(前回参加の方も2名意思表示してくださった。)

**2006年5月29日(月)-1**

渉外内容：名古屋市教育委員会 担当者に再告知依頼

渉外方法：電話

アンケートの返信が少ないので、再度、電話当日の第4月曜日に行われる定期ミーティングでの告知をお願いした。また、すでに返信をくださった2名<sup>5</sup>の方へのお礼の手紙をFAXして、渡していただくようお願いした。これは最初、アンケートのフォームにアドレス記入欄を設けていなかったため、こちらから直接連絡をとる手段がなかったためである。後に、アドレス記入欄を追加したが、これは最初から設けておいたほうがよかった。アンケートは参加する意志がある方に限られていたので、そういう方はお聞きしても教えてくださったからである。

**2006年5月29日(月)-2**

渉外内容：民間派遣会社の担当者にテキストデータで依頼文を送る

渉外方法：メール

名古屋市教育委員会経由で実習のお知らせを受け取られた株式会社アルティアセントラルの担当者の方からメールが届き、紙媒体ではなくデータでの送信依頼があった。すぐに日本語、英語の両方の文書を添付書類ではなく<sup>6</sup>メール本文に入れて2通返信した。

**2006年5月29日(月)-3**

渉外内容：民間派遣会社のALTスーパーバイザーの方から連絡

---

<sup>5</sup> この2名の方は前回も参加してくださった方である。

<sup>6</sup> 先方が使われているソフトがWordとは限らないので、添付書類での送付は避けた。

渉外方法：メール

株式会社アルティアセントラルのALTのスーパーバイザーの方からメーリングリストに情報を流したとのメールをいただく。この後順調に参加希望のアンケート返信があり、実習実現に向けて大きく前進した。(→返信状況：5/29 3名、5/30 4名、6/1 1名、6/8 1名、6/13 1名)

#### **2006年5月31日(月)～6月初旬**

渉外内容：アンケート返信者(全員参加希望者)にアンケート受信の報告メール

渉外方法：メール

参加希望者との連絡をスムーズにとるため、WEBアンケートの項目にアドレス欄を追加。これによりアンケート返信者にお礼のメールが送信可能になった。渉外担当はその都度参加希望のお礼のメールを出した。

#### **2006年6月8日(木)**

渉外内容：アンケート返信のあった名古屋市教育委員会、民間派遣会社2社にコースデザインのためのニーズ調査インタビュー許可のお願い

渉外方法：電話

3機関に電話した結果、ALTの方々のミーティングの日時は所属機関にかかわらず同一ということが判明した。6月のミーティングは第2・4月曜日の15:00である。(6月12日・6月26日)また、ミーティングは全員参加なので、ミーティング前後にインタビューさせていただくのが、先方にとっても、こちらにとっても都合がいいことがわかった。JETとコスモはミーティング後の4時ぐらいから、(株)アルティアセントラルはミーティング前の2時から3時がいいのではないかと担当者の方々から教えていただいた。ミーティング場所はそれぞれ別々であるので、先方の人数、時間に合わせ実習生の動きを検討することにした。

アンケートに所属記入欄を設けていなかったため、返信してくださった先生方の所属を確認する。その結果JET(名古屋市教育委員会)4名、コスモ1名、(株)アルティアセントラル5名と判明。(1名確認もれあり)

#### **2006年6月8日(木)**

渉外内容：アルティアセントラル担当者の方にアドレスのわからない方のアドレス確認

渉外方法：電話

アドレス欄がなかった初期の返信者はアドレスが不明だったため、その方の所属機関の担当者の方にアドレスのわからない方のお名前を連絡、先方よりこちらにメールしていただくようお願いする。<sup>7</sup>

#### **2006年6月9日（金）**

渉外内容：名古屋市教育委員会担当者に所属不明の先生方の所属先確認を依頼

渉外方法：電話

アンケート返信者のうち6月8日時未確認の方の所属先を確認した。最終的に名古屋市教育委員会所属4名、コスモ2名、(株)アルティアセントラル6名の計12名となる。

#### **2006年6月12日（月）**

渉外内容：名古屋市教育委員会所属のALTインタビュー

渉外方法：ミーティング場所を訪問、面会

実習生全員で名古屋市教育委員会所属のALTの方をミーティング場所の名古屋市教育館に訪問する。JET ミーティング終了後の4時よりインタビュー開始させていただく。予定の4名のほかに飛び込み1名の参加希望があり、5名の方にインタビューをする。

#### **2006年6月17日（土）**

渉外内容：新規アンケート返信者と連絡をとる

渉外方法：メール

1名新規アンケート返信があったため、所属をお聞きするためとインタビュー実施についてのメールを返信する。

#### **2006年6月19日（月）**

渉外内容：民間派遣会社2社の担当者と6月29日（月）のミーティングの時間についての打ち合わせ

---

<sup>7</sup> 個人情報保護法の関係で直接はお聞きできないので、会社から本人に連絡、その後こちらに本人からメールしてもらうという手続きを踏まなければならない。

渉外方法：電話

コスモ 2 名は場所は自社ビルで、ミーティング後の 4 時以降を希望された。(株)アルティアセントラル 7 名は 15 時から 16 時のミーティングをのぞいた 13:30 から 15:00、16:00~16:30 がインタビュー可能時間であり、場所はミーティング場所で借りている 2 部屋を、ミーティング時間外なら自由に使っていいとの許可をいただいた。

**2006 年 6 月 23 日 (金)**

渉外内容：夏の実習アナウンスについて

渉外方法：電話

名古屋市教育委員会担当者より 6 月 26 日のミーティングでの夏の実習アナウンスの申し出のお電話をいただいた。アルティアセントラル、コスモ所属の ALT の方にインタビューするのが 6 月 26 日なので、そのあと最終決定してすぐお知らせするとお伝えする。

**2006 年 6 月 21 日 (水)**

渉外内容：ALT の方々にインタビュー希望時間をうかがう

渉外方法：メール

アルティアセントラルの方は時間の調整が必要なため、連絡先不明の 1 名をのぞく 6 名の方にメールで 6 月 26 日のインタビュー希望時間をうかがうメールを出す。即日 2 名より返信がある。

**2006 年 6 月 23 日 (金)**

渉外内容：コスモ担当者とインタビュー日時変更のご相談

渉外方法：電話

こちらの人数の関係上、6 月 26 日 (月) 同時に 2 社インタビューは不可能だと判断、人数が少ないコスモの方に変更をお願いすることにした。コスモの担当者の方を通してインタビュー予定だったお二人に、別の日でご都合がいい時間と場所を教えていただけるよう、お願いする。最初次回のミーティングの 7 月 10 日というご提案をいただいたが、それでは遅すぎるため、6 月中にとお願いする。

**2006年6月25日(日)**

渉外内容：アルティアセントラルの方にインタビュースケジュールについて確認

渉外方法：メール

アルティアセントラルのALT全員の方の返事がそろい、インタビュースケジュールが決定したので、返信お礼と確認のメールを出す。

**2006年6月26日(月) ①**

渉外内容：アルティアセントラル所属のALTの方にインタビュー

渉外方法：ミーティング場所訪問(13:30から17:00)

実習生全員でインタビューに出向く。詳細は3章に記述する。7名の予定者に飛び込みで2名追加希望<sup>8</sup>があったため、全員で9名の方にインタビューすることとなった。会議室が借りられる時間が17時までだったので、飛び込みの方は時間が20分ずつしかとれなかった。

**2006年6月26日(月) ②**

渉外内容：コスモ所属のALTの方のインタビュー日時決定

渉外方法：電話

コスモの担当者を通して連絡をお願いしていた方のうち、1名とアポイントがとれる。

**2006年6月27日(火) 17:00から約30分**

渉外内容：コスモ所属のALTの方にインタビュー

渉外方法：コスモ本社ビル訪問

コスモの希望者のうち1名の方に田中・中島がインタビューに出向いた。ALTの方は当日仕事が終わってから、インタビューのために本社まで来てくださった。

**2006年7月3日(月)**

---

<sup>8</sup> 飛び込み参加の2名のうち1名はアンケートを返信してくださったとのことだったが、こちらには届いていなかったため、当日対応となった。

(1)

涉外内容：JET 4名、アルティアセントラル 9名、コスモ 1名の方にコース日時決定の連絡

涉外方法：メール

コース日時決定のメールを送信する。アドレスのわからなかった1名は後日名古屋市教育委員会の担当者の方においてミーティング時にFAXを渡してもらい連絡する。

---

(2)

涉外内容：コスモ担当者の方にサマーコースの実施日の連絡と、残り1名のインタビューの方の日時セッティングのお願い

涉外方法：電話

#### **2006年7月5日(水)**

涉外内容：コスモの担当者から保留のコスモ1名の先生不参加の連絡あり

涉外方法：電話

ALTの方のご予定がこちらが決定したコース日時に合わないため、インタビューもキャンセルとなった。

#### **2006年7月6日(木)**

涉外内容：名古屋市教育委員会担当者に7月10日(月)のJETのミーティングで日時決定の連絡の依頼

涉外方法：電話&FAX

連絡がついていない参加者1名を含め全員に、確認の意味で会議でのアナウンスとFAXした手紙の手渡しをお願いする。

#### **2006年7月9日(日)**

涉外内容：参加の返事のあった10名に防災センターツアーお知らせと時間割訂正

涉外方法：メール

最初に送ったメールに間違いのあった時間割の時間の訂正と、防災センターツアーのお知らせのメールを送信した。欠席のお返事のあった1名の方にも、今までのご協力のお礼と防災センターツアーのお知らせを送る。

**2006年7月10日（月）**

渉外内容：名古屋市教育委員会担当者に防災センターツアー告知のお願い

渉外方法：FAXと電話

『防災センターオプションツアー』の案内を電話当日のJETの会議のときに渡していただくように担当者にFAXし、確認のためお電話をした。その際、JETの方の8月の研修についての詳しい内容をお聞きすることができた。

この日宣伝していただいたおかげでJETから1名オプションツアー参加のメールがあった。

**2006年7月11日（火）**

渉外内容：返信のない方1名に防災センターのツアー参加の有無の確認

渉外方法：メール

**2006年8月5日（土）**

渉外内容：参加者全員

渉外方法：場所と時間の確認メール送信

**2006年8月11日（金）**

渉外内容：名古屋市教育委員会、民間派遣会社2社の各担当者の方に実習参加協力のお礼と実習が無事終了したご報告の電話

渉外方法：電話

名古屋市教育委員会の方は担当者の方が不在で直接はお話しできなかったが、実習についてご存知の別の方とお話しすることができ、お礼をお伝えした。

**2006年8月19日（土）**

渉外内容：参加者全員にサマーコース参加お礼

渉外方法：メール

参加してくださったALTの皆さんにお礼のメールを出した。

### 2.1.3 対外文書

以下に本実習での主な対外文書を記す。文書(1)と(6)については検討段階から完成までの時間の流れを示した。

#### (1)教育実習コースの告知と参加者募集およびニーズ調査のためのアンケート依頼

##### I.英語版

Invitation to Willing Participants For the NU Intensive Japanese Program  
And Questionnaire Regarding Course Design

##### II.日本語版

The NU Intensive Japanese Program (名古屋大学集中日本語コース)  
参加者募集およびコースデザインのためのアンケートのお願い

2006年5月4日(木)	下書き作成
2006年5月5日(金)	改訂版作成
2006年5月6日(土)	本研究科大学院生英語母語話者に手紙英訳依頼
2006年5月10日(水)	手紙英訳をいただく
2006年5月11日(木)	日本語版手紙2枚にまとめる 英語版手紙3枚にまとめる
2006年5月12日(金)	手紙印刷
2006年5月13日(土)	手紙最終版 yahoo グループに up I 実習内容紹介の手紙 (英語版) ※この内容は WEB ページにもレイアウトしなおして活用。 II 日本語版手紙 (各機関の窓口の方用)
2006年5月15日(月)	名古屋市教育委員会持参
2006年5月29日(月)	民間派遣会社にテキストデータでメール送信

#### (3)名古屋市教育委員会に教育実習コースの再告知の依頼文書

##### タイトル

名古屋大学大学院 日本語教育実習について  
参加者募集とアンケート返信のお願いの告知のお願い

2006年5月29日(月) 名古屋市教育委員会担当者に FAX

(4)アンケート返信お礼の手紙（英語）

2006年5月29日(月) 名古屋市教育委員会担当者に FAX、アンケート返信者2名に手渡ししていただく

2006年5月31日～6月 民間派遣会社の ALT の方にはメールで送信

(5)インタビュー希望日時伺いのメール（英語）

Subject: Regarding Interview for Summer NIHONGO program

2006年6月21日(水) アルティアセントラル所属の先生方にメールにてインタビュー時間の希望をきく

(6)サマーコース実施日決定のお知らせと最終的な参加の意志確認のための手紙（英語）

Subject: Regarding the NU Intensive Japanese Program

2006年6月30日(金) 下書き後、英語母語話者の方に直していただく。

2006年7月3日(月) コース参加希望者全員にメール送信

(7) オプションコース「防災センター訪問」のお知らせについての手紙（英語）

Subject: Regarding Optional Tour of the NU Intensive Japanese Program

2006年7月8日(土) コース参加決定者全員にメール送信

(8)JET で参加の意志を示してくださった方が JET 研修と日時が重なっているため、確認のメール（英語）

2006年7月21日(金) 本人に送信

(9)参加申し込みの方にコース開始の確認メール

Subject: the NU Intensive Japanese Program starts on August 7th

2006年8月5日(土) 参加決定者全員にメール送信

(10)参加お礼のメール

Subject: Letter of thanks

2006年8月19日(土) 参加者全員にメール送信

#### 2.1.4 反省点

5月15日訪問の名古屋市教育委員会所属の ALT の方の会議でアンケートについて参加意志のない方へも回答のお願いをしたが、結果的に参加意志のある方からのみであった。今回回収効率を考慮して WEB アンケートを試みたが、顔を見て話せる方々にはその場でや

っていただくという方法をお願いしてもよさそうな感じであった。JETの希望者が少なかったのは、単なる日程的なことなのか、日本語の必要度の問題か、初期のアクセス手続きの面倒さのためかわからないが、次回実習を担当される方は留意されたい。また、会議の運営はすべて英語だったので、もっと英語の準備をきちんとしておくべきだった。

渉外の仕事については大きくわけて3機関との連絡、ALTの方との連絡、その都度の文書作成があったが、実習担当者が多い場合はALTの方への連絡担当者を別にするとよいのではないかと思う。

＜報告担当 田中典子＞

## 2.2 渉外(内部)

渉外(内部)担当は、例年実習期間に使用する教室の確保・管理を行っている。今年度の夏季実習ではこれに加え、録画機器の確保、Yahoo!グループ<sup>9</sup>の管理、災害対策室への講義申し込み、防災センターへの問い合わせを行った。

### 2.2.1 授業用の教室及び設備について

本年度の教室使用状況と今回の参加人数を考慮し、文系総合館の609、612、623を使用することとした。また、本年度は授業後に質問時間(以下、Free Question Time)を設けた。Free Question Timeの際には、文系総合館6階のファカルティラウンジを使用した。

教室の予約は、国際言語文化棟の事務室にて行った。予約の際には、事務室に実習担当教官を通じて実習予定期間と使用教室を伝えた。ファカルティラウンジの使用に関しては、特に必要な手続きはなかったため、日本語文化専攻助手に確認を取り、使用する教室には試用期間と使用内容を記した紙を貼って告知した。

教室とファカルティラウンジの使用許可が下りた後、文系総合館の受付に使用教室と使用期間を連絡し、当日、教室の鍵が他者に借りられてしまうという万が一の自体を防ぐために、文系総合館の受付窓口に使用教室と日時を記した紙を貼らせてもらった。また、事前に、使用する教室の入り口に「日本語教育実習のため、8月7日から8月10日の10時から15時まで教室を使用します。期間中は御迷惑をおかけしますが、ご協力よろしく申し上げます。」という紙を掲示した。

各クラスの人数と部屋の広さ、使用可能な機器(テレビ、ビデオ、DVD)、授業内容を併せて検討した上で、使用する教室を以下のように決定した。なお、623は予備として確保した。

---

<sup>9</sup> Yahoo!グループとは、インターネットサイトYahoo(<http://www.yahoo.co.jp/>)のホームページ上で使用できるツールである。ファイルやメールなどを共有することができる。

	8月7日(月)	8月8日(火)	8月9日(水)	8月10日(木)
1限 70分	初級クラス 609 上級クラス 612			初級クラス 612
2限 70分				上級クラス 609
3限 90分				合同クラス 609
Free Question Time	ファカルティラウンジ			

612 <機器 (テレビ、ビデオ、DVD) あり>

609 <機器なし。8月10日3限のみ、612教室の機器を移動させ使用。>

実習期間中は、各クラスの担当者に使用する教室の管理を任せた。毎朝受付で鍵を借り、使用後、全員で返却した。予備として確保した 623 教室は、渉外(内部)担当の服部が管理した。

## 2.2.2 録音機器の確保について

本実習は、各クラスに2台の録画機器を設置した。そのため、日本語文化専攻所有の録画機器だけでは数が足りず、学内にある情報メディア教育センター<sup>10</sup>に機材の貸し出しをお願いした。情報メディア教育センター内のスタジオ管理室に機材貸し出しが可能であるか問い合わせし、指示に従って手続きを行い使用の許可を得た。

## 2.2.3 Yahoo!グループの管理について

今年度は実習に当たって、Yahoo!グループを開設することにした。メンバーリストを通じて実習生同士の意見交換を密に行い、情報を共有するため、各自作成した文書や教材などのファイルをYahoo!グループにアップロードした。

2006年5月2日にYahoo!グループを開設し、以降のフォルダの整理等は、主に渉外(内部)担当の服部が管理した。

<sup>10</sup> 情報メディア教育センター：http://www.media.nagoya-u.ac.jp/

#### 2.2.4 防災授業実施への手続きについて

今回は新しい試みとして8月10日3時限の授業・オプションコースの連続で「防災授業」を取り入れた。この取り組みに関連し、次の流れで手続きを行った。

**2006年7月7日(金)**

名古屋市港防災センターへ電話で施設使用に関する問い合わせと見学予約の申し込み。

**2006年7月24日(月)**

名古屋大学内災害対策室<sup>11</sup>に防災講義に関する問い合わせ。電子メールで講義を申し込み、受講希望日と受講人数を伝える。同日、災害対策室より講義の担当講師と日時決定の連絡を受ける。

**2006年7月27日(木)**

名古屋大学災害対策室にて、木村玲欧氏より防災講義を受ける。 9時～11時

**2006年7月29日(土)**

名古屋大学災害対策室にDVD貸し出しを申し込み、了承を得る。

#### 2.2.5 ティーパーティーの教室について

最終日にティーパーティーとして、軽食と飲み物を準備し実習生と学習者、担当教官の歓談の時間を設けた。ティーパーティーを行う際には、昨年度の報告を参考に、文系総合館6階のファカルティラウンジを使用した。ファカルティラウンジの予約と使用については、前述の通りである。

<報告担当 服部明子>

---

<sup>11</sup> 名古屋大学災害対策室：<http://anshin.sharaku.nuac.nagoya-u.ac.jp/taisaku/>

## 2.3 WEB担当

1.1でも触れたように、本実習では学習者募集のため、名古屋市に勤務するALTの方々に参加を呼びかけた。名古屋市教育委員会に赴き直接呼びかけた他、本実習のホームページを設置し、そこからも本実習で行うコースへの参加を促すようにした。このようなホームページによって、コース概要も説明することができ、また事前調査として行うアンケートもWEB上でやりとりができるという大きな利点があり、大いに活用できたといえよう。ホームページ上の言語はすべて英語である。実習生が日本語で作成した日本語の文書を英語ネイティブに翻訳してもらった。

主な仕事内容は以下の通りである。

- ・2006年度夏季日本語教育実習のホームページ・WEBアンケートの作成
- ・作成したホームページのサーバーへの接続作業

### 2.3.1 2006年度夏季日本語教育実習のホームページ・WEBアンケートの作成

コンポーザーはWEB上でフリーインストールできるものを利用した。ホームページの内容は、本実習を行う経緯と実習生の名前、所属、連絡先を記した「トップページ」、コースの概要を記した「コースについて」、事前調査の第一段階として行うアンケート調査についての説明(実施する目的)を述べた「アンケートについて」、そして実際に対象者に回答してもらった「アンケート」の4つのページを作成した。「アンケート」で、どのような項目をどのような目的で問うのかなどは、第3章で詳述する。ここではどのような手順でアンケートの返信フォームを作成したかについて述べる。

アンケートの返信フォームには、インターネット上で無料配信されているフォームメーカー(CGIの一種)を利用した。フォームメーカーはホームページ上の回答フォームから送信された内容をデコードするため、文字化けを防ぐことができるという利点がある。また、今回利用したサービスでは、アンケートに用いるテキスト入力やチェックボックスなどのフォームタグも、コピー&ペーストすることができ、簡単に作成できた。

### 2.3.2 作成したホームページのサーバーへの接続作業

サーバーへの接続には、名古屋大学情報メディアセンターのコンピュータに入っているFFFTPというftpクライアントソフトを利用した。これらサーバーへの接続の仕方は、名古屋大学で指定されている手順で行った<sup>12</sup>。

(報告担当 中島忍)

---

<sup>12</sup> これらの手順については、名古屋大学内でのみ公開されているため、ここでは割愛する。

## 2.4 教材・備品・会計

本節は教育実習における教材・備品・会計の管理について報告する。

### 2.4.1 教材

実習のコースデザインやシラバスデザインなどの参考資料として、必要となる書籍について検討を行った。実習生は各自で備えたほうがよいと思われる書籍を捜し、それらが妥当かどうかを話し合った。購入を決定した書籍をリストアップし、大学の所蔵を確認した上で、大学が所蔵していない書籍を助手の先生に申し込んだ。以下、購入した書籍のリストである。

表 3 教材リスト

1	書名	日本語生中継聞いて覚える話し方 中・上級		
	著者	宮谷敦美 梶本総子		
	出版社	くろしお	出版年数	2004年
2	書名	日本語生中継聞いて覚える話し方 初・中級		
	著者	ボイクマン総子 宮谷敦美 小室リー郁子		
	出版社	くろしお	出版年数	2006年
3	書名	新装版なめらか日本語会話		
	著者	富坂蓉子		
	出版社	アルク	出版年数	2005年
4	書名	ほんとうの敬語		
	著者	萩野貞樹		
	出版社	PSP 研究所	出版年数	1995年
5	書名	らくらく日本語ライティング		
	著者	田口雅子		
	出版社	アルク	出版年数	1995年
6	書名	漢字はむずかしくない		
	著者	武部良昭		
	出版社	アルク	出版年数	1993年
7	書名	大人語の謎		
	著者	糸井重里		
	出版社	東京糸井重里事務所	出版年数	2005年

8	書名	日本語を話すトレーニング		
	著者	森口稔		
	出版社	ひつじ書房	出版年数	2004年
9	書名	中・上級学習者のための漢字と語彙 Rference book		
	著者	アメリカカナダ大学連合日本研究センター		
	出版社	ジャパントイムズ	出版年数	1994年
10	書名	中・上級学習者のための漢字と語彙 Workbook vol.1		
	著者	アメリカカナダ大学連合日本研究センター		
	出版社	ジャパントイムズ	出版年数	1994年
11	書名	中・上級学習者のための漢字と語彙 Workshop vol.2		
	著者	アメリカカナダ大学連合日本研究センター		
	出版社	ジャパントイムズ	出版年数	1994年
12	書名	日本語を書くトレーニング		
	著者	野田尚史 森口稔		
	出版社	ひつじ書房	出版年数	2003年
13	書名	中・上級者のための速読日本語		
	著者	三浦明 岡まゆみ		
	出版社	ジャパントイムズ	出版年数	1998年
14	書名	ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語会話		
	著者	山内博之		
	出版社	アスク	出版年数	2000年

#### 2.4.2 備品

補助教材作りと実習に使用する文房具やビデオテープなどの備品の購入と管理を行った。ミーティングで実習に使用する備品について検討し、院生室にある物を確認した上で、不足の物品や必要とする備品を購入した。以下、在庫があった備品と本年度(2006年度)新たに購入した備品をリストにして示す。

表 4 在庫備品リスト

	備品名	数量
1	CD-RW 650MB	5枚
2	DVD-RW(120分)	5枚
3	VHS テープ(120分)	9巻

4	ビデオテープ(60分、LP90分)	2巻
5	ビデオテープ(80分、LP120分)	60巻
6	デジタル用カセット(60分)	2巻
7	A 4 size 2穴ファイル	2冊
8	A 4 size 2穴リング式ファイル	1冊
9	B 4 size 2穴ファイル	3冊
10	B 4 size バインダー式ファイル	1冊
11	カラークリアホルダー	3枚
12	画用紙(白、大)	1枚
13	画用紙(白、中)	4枚
14	画用紙(白、小)	49枚
15	画用紙(浅茶、大)	1枚
16	画用紙(濃茶、大)	1枚
17	マグネットシート(粘着剤付)19×9mm	349枚
18	領収証	1冊

表 5 2006 年度購入備品

	購入期日	物品	用途	数量
1	7月4日	256MB USB メモリー	電子資料保存	1個
2		A 4 size 2穴ファイル	教材作成	5冊
3		A 4 size 2穴リング式ファイル	会議記録保存	1冊
4		ファイルボックス	ファイル整理	3個
5	7月27日	DVD-RW(120分)	ビデオダビング用	20枚
6		ビデオテープ(80分、LP120分)	授業記録	20巻
7		A 4 size 2穴ファイル	教材作成	18冊
8		A 4 光沢紙	写真印刷	20枚
9		マス目模造紙(ピンク)788×1085mm	ポスター作成	2枚
10		丸マグネット(小)	授業用	12個
11		紙コップ	ティーパーティー用	36個
12		紙皿	ティーパーティー用	18枚

### 2.4.3 会計

実習の運営のため、コースに参加する学習者から教材費として1人300円、実習生からは一人500円を徴収した。また、実習科目担当教官である鷺見先生からも援助していただいた。備品の購入は公費で購入したため、費用はかからなかった。渉外・渉内の電話代・交通費や、ティーパーティーに使用した費用などの明細を以下の表で示す。

表 6 収支明細

収入	金額(円)	支出	金額(円)
昨年度繰越金	24	電話代(服部)	200
学習者教材費 300円×9人	2700	電話代・FAX代(田中)	764
実習生 500円×4人	2000	交通費(田中)	720
鷺見先生	500	インタビュー交通費(中島)	200
		英語文書ネイティブチェックへの謝礼	500
		ティーパーティー用飲食代	2840
合計	5224	合計	5224
来年度繰越金(収入合計－支出合計)＝ 0円			

### 2.4.4 反省点

本年度教育実習における教材・備品・会計の管理において、以下の反省点が挙げられる。

- ・ 在庫があった備品の把握が不十分であったため、備品を2度に渡って購入することになってしまった。
- ・ 授業中に使用するマグネットを購入したが、予想以上に必要であったため、不足してしまった。また、購入したマグネットの磁力が弱かったので、サイズも大きく強力なものを購入したほうがよかった。
- ・ ティーパーティーの飲み物は足りなかった。もっと購入するべきであった。また、お茶より炭酸飲料が好まれる傾向があった。

<報告担当 許惠雯>

## 第3章 事前調査

### 3.1 事前調査実施の目的

1.2 でも述べたように、当該のコースは学習者が求める授業を模索し提供するケーススタディであることから、コース・シラバスデザインおよび教材作成のため、事前のニーズ分析やレディネス調査が必要とされる。本実習は2段階に渡って事前調査(WEB アンケートとインタビュー調査)を行った。以下、この2点について詳述する。

### 3.2 第一段階の調査(WEB アンケート)について

前節で述べた目的の他、参加してもらおう日本語学習者の募集のため、本実習で開講するコースのホームページを開設し、ウェブ上からアンケートに回答してもらおうようにした。

#### 3.2.1 アンケートの構成・内容

アンケートの構成は、「あなたについて」として回答者の氏名や日本語学習歴などを問うブロック、「あなたの日本語について」として回答者の日本語レベルを問うブロック、「あなたの要望について」として回答者が本実習のコースに望むものを問うブロックを設置し、最後に「このプログラムに参加する意志について」として本実習のコースに参加する意志があるか・あるとすればいつがいいのかなどを、学習者の母語である英語で聞いた。以下、WEB アンケートの日本語訳を示す。表の左が質問事項、右が回答方法である(「/」は選択肢であることを表わす)。なお、本実習で開講したコースのホームページやアンケートの詳細は、2006年度日本語教育実習報告ホームページの「NU intensive course ホームページ」を参照されたい。

I. あなたについて	
氏名	(書き込み式)
国籍	(書き込み式)
日本にはどのくらい住んでいますか。	1年未満/1~2年/2~3年/3年以上
日本語能力試験を受けたことがありますか。 ある方は合格したレベルと合格年を教えてください。	はい/いいえ 級：1/2/3/4 合格年：2005/2004/2003/2003以前

以前はどこで日本語を学びましたか。	専門科目として／選択科目として／語学学校で／自分で／その他
どのくらいの期間日本語を学びましたか。	1年未満／1~2年／2~4年／4年以上

II. あなたの日本語について	
あなたの日本語を <u>話す能力</u> のレベルを選んでください。	初級／初中級／中級／中上級／上級
あなたの日本語を <u>聞く能力</u> のレベルを選んでください。	初級／初中級／中級／中上級／上級
あなたの日本語を <u>書く能力</u> のレベルを選んでください。	初級／初中級／中級／中上級／上級
あなたの日本語を <u>読む能力</u> のレベルを選んでください。	初級／初中級／中級／中上級／上級
あなたの <u>ひらがな</u> 使用の能力レベルを選んでください。	読むことも書くこともできない／読めるが書けない／どちらもできない
あなたの <u>カタカナ</u> 使用の能力レベルを選んでください。	読むことも書くこともできない／読めるが書けない／どちらもできない
あなたの漢字を <u>読む能力</u> レベルを選んでください。	全く読めない／標識などの漢字は読める／新聞の漢字も読める
あなたの漢字を <u>書く能力</u> レベルを選んでください。	全く書けない／くだけた手紙の漢字は書ける／漢字を使ってエッセイが書ける

III. あなたの要望について	
あなたが目標とする最終的な日本語レベルは次のうちどれですか。	仕事で日本語を使える／日常生活において周囲の人々とコミュニケーションできる／友達と会話できる／最小限の日本語で日常生活をする／挨拶のみできる
あなたが日本語を必要とする場面はどこですか。	仕事／旅行／日常生活／友達作り／その他
このプログラムで得たいスキルはどれですか。	話す力／聞く力／書く力／読む力／その他
その他、要望することや聞きたいことがあれば自由に書いてください。	(書き込み式)

IV. このプログラムに参加する意志について	
あなたはNU インテンシブジャパニーズプログラム <sup>13</sup> に参加しようと思っ ていますか。	はい/いいえ
もし参加意志があるなら、次の3つの期間から都合の良いものを選んでください。 2つ以上選択できます。	①7/25(火)、26(水)、27(木)、28(金) ②8/7(月)、8(火)、9(水)、10(木) ③8/17(木)、18(金)、21(月)、22(火) *この中から希望が最も多かった日程に開 講します。
差し支えなければ、あなたのE-mailアドレスを教えてください <sup>14</sup> 。	(書き込み式)

### 3.2.2 WEB アンケートの変更点

ホームページやアンケート内容は、2005年度の名古屋大学夏季日本語教育実習で使用されたものを参考にしたが、今年度の実習に合わせ、必要な項目を付け足し、また不必要な項目を削除するなどした。

#### 主な変更点

##### 1. 内容

###### (1)1年後アンケートの取りやめ

昨年度(2005年度)のWEBアンケートでは、前年度(2004年度)の参加者に、役立った学習項目、取り入れてほしかった項目などを聞いているが、1年前の記憶がどれほど残っているか測りきれないということ、昨年度の授業効果を検証するのが困難であるという理由から、今回はこれをとりやめることとした。

###### (2)第二言語、第三言語を問う項目の削除

英語ネイティブであることがわかっていること(多言語を使用している可能性もあるが、考慮に入れるほどではないということ)、第二言語・第三言語などはその後のインタビューなどで知ることができるという理由から、対象者の母語のみを問うこととした。

###### (3)来日回数、日本でしたいことを問う項目の削除

今回のコース参加者募集の対象者はすべて既に日本に住んでおり、全員が調査時点で少なくとも来日1年になるため不要と考えた。

<sup>13</sup> 本実習で立てたコースの名前。

<sup>14</sup> この項目は、WEBアンケート実施期間中に必要であることに気づき、途中で付け足した。

(4)日本語能力試験受験経験の有無のみを問う

昨年度の WEB アンケートでは、日本語の能力を測る全ての試験について聞いていたが、国によって実施されている試験の詳細は把握しきれないという理由から、日本語能力試験のみ聞くこととした。

(5)授業で用いる文字について問う項目の削除

昨年度の WEB アンケートでは、授業で用いてほしい文字を問う項目があったが、レベルに関する回答結果から教師が授業内で用いることのできる表記（ひらがな・漢字・ローマ字）が判断できると考えたため削除した。

(6)興味や趣味について問う項目の削除

興味や趣味についてはコース参加希望者に対して行うレベルチェックの意味合いをもつ第二段階の調査(インタビュー)で問うことにした。第一段階では基本的な事項に絞ったため、WEB アンケートでは削除した。

(7)4 技能のうちどれを伸ばしたいかを問う項目の追加

どの技能に重点を置いているかを知ることによってコースの大枠をデザインする際に参考にするためこの項目を付け足した。

## 2. 形式

- ・コースへの参加意志のない人も、なるべくアンケートに答えてほしい旨を付け加えた。結果的にはコースへの参加を希望する方からの回答のみであったが、ALT 対象としたコースをデザインするにあたって、なるべく多くの ALT の意見を取り入れることが有効であると判断した。

### 3.3 第二段階の調査(インタビュー)について

3.2 のWEBアンケートでコースへの参加を希望するという方 15 名<sup>15</sup>を対象に、3 日に分けてインタビュー調査を施した<sup>16</sup>。3.1 で述べた事前調査実施の目的に加え、実際の対話を通して、学習者の日本語のレベルやコースへの要望を知ること、また学習者の個性(どのような性格で何に興味をもっているのかなど)を知る手掛かりにすることを目的とし実施した。インタビューは 1 人の対象者に対し 1 人ないし 2 人の実習生で行った。

対象者の日本語レベルを測るという目的のため、日本語使用を原則とした。日本語の難易度も初めは敬語を織り交ぜた難しいものを使用し、伝わらない場合は簡単な日本語に言い換えていく方法をとった。これらのことは事前に実習生同士で確認し合い、インタビュ

---

<sup>15</sup> WEBアンケートを返信してくださった方の他に、インタビュー当日に参加表明をした方にも対応しインタビューを施した。またインタビュー後コースへの参加を辞退した方もいるため、実際のコース参加者人数と一致しない。

<sup>16</sup> 日程の詳細は 1.4 で述べた通りである。

一に臨んだ。またインタビューの会話は、対象者に許可をもらってから、ICレコーダーで録音し、後日その内容・対象者の日本語レベルやニーズを文書化し、すべての実習生で共有した。

### 3.3.1 インタビュー調査の項目

インタビューで問う質問内容を事前に話し合い、一覧にして共有した。その項目を以下に示す。対象者によっては、これらの項目以外のことにも話が広がっていくこともあった。

#### <パーソナリティ>

名前  
自宅はどこか  
いつ来日したか  
勤務先の学校はどこか  
週どのくらい授業を担当しているか  
名古屋大学までのアクセス方法・所要時間

#### <日本語の学習歴>

今までどのくらい日本語を学んだか  
どこで日本語を学んだか  
これまで使ったことのある教科書はどのようなものか

#### <インターネットの環境など>

連絡には電話がいいかメールがいいか  
自宅にパソコンがあるか・日本語は読めるか  
メールチェックの頻度

#### <日本語の使用場面>

授業はすべて英語で行うか  
学校で日本語を使うことはあるか  
教員のミーティングは英語で行うか  
いつ日本語を使うか  
日本語で何を書く／読むか  
勤務日以外の日はどのように過ごしているか  
日本人の友達はどのくらいいるか

日本で旅行に行くか  
敬語はどんなとき必要か  
日本語が話せなくて困っていることはあるか

#### <開講時期の確認>

開講希望は8月の上旬・中旬が多いが参加できるか  
午前何時から午後何時まで参加できるか  
希望した日程以外に都合がいいときはあるか

#### <その他>

話す力・聞く力・書く力・読む力のうち、どれが一番必要か  
日本に対してどのような興味・関心をもっているか  
夏休みに帰国する予定はあるか  
日本語以外に外国語を習った経験はあるか

### 3.3.2 インタビュー結果から

教育現場に勤めるALTということから、教頭先生や校長先生をはじめとする上司に対する敬語を必要としている方が多いのではないかという予測を立てたが、それに反して、敬語に対する意識はそれほど高くなく、ニーズは低いことが分かった。学習者の日本語レベルについては、大学で専攻として日本語を学んだというものから、英語のみで不自由なく日常生活を送ることができるためほとんど日本語が話せないというものまで幅広く、学習者の日本語レベルにかなりの差があることがわかった。しかし同時に、全員が自らの意志でコースに参加したいという学習者であるため、どの学習者も学習意欲が非常に高いことが再確認された。

話した内容は、インタビューを担当した者がまとめたり文字起こしをしたりした後、Yahoo!グループにアップロードし、すべての実習生で共有した。音声ファイルはサイズが大きく、アップロードできなかつたため、院生室のパソコンに一時保存し、各自でコピーするなどの処置をとった。

これらの情報を共有した後、クラス分けを行い、ニーズ分析に基づくシラバスを立てた。クラスはAクラスとBクラスの2つに分け、人数はそれぞれ4名、7名<sup>17</sup>とした。クラスの概要は次章で詳しく述べる。

---

<sup>17</sup> 7名のうち、2名は途中で都合が合わなくなり実際には参加していないため、最終的には5名が初中級クラスとして参加した。

### 3.4 事前調査の反省点

2.3 の WEB 担当の節とも関連することであるが、以下に事前調査における反省点を挙げる。

①実習生が立ち上げたホームページの URL が長かった。

名古屋大学で指定される URL を使用するため、ある程度仕方のないことではあるが、ホームページの URL を、紙媒体の手紙で周知したため、アドレスバーに打ち込んでアクセスすることが面倒であると感じた人も少なくなかったのではないかと考えられる。(株)アルティアセントラルでは、担当者の好意でメーリングリストでも周知してもらえたこともあってか、参加希望者が多かった。

②WEB アンケートに、回答者の所属先を記入する欄、メールアドレスなどの連絡先を記入する欄がなかった。

メールアドレスについては、途中で気づき回答欄に入れたが、所属先とともに最低限必要な情報であった。

<報告担当 中島忍>

## 第4章 クラス概要

### 4.1 はじめに

2章で詳述したように、今回は2種類の事前調査をもとに（学習者2名はインタビューのみ）クラス分けを行った。その結果、2つのレベルを設けることにした。1つは日本語で支障なく日常生活を営めるレベルの中上級から上級レベルのAクラス、もう1つは初級前半、後半をひとつにまとめたBクラスである。Bクラスは学習者によってかなりのばらつきがあり、2つに分けることも検討したが、実習生の人員の問題（4名）もあり、チームティーチングを行うためには分割は不可能と判断した。以下クラス別に報告する。

### 4.2 Aクラス概要

#### 4.2.1 担当実習生

田中典子、服部明子の2名が担当した。ニーズ・レディネス分析から学習目標、シラバス決定を行い分担を決めたのちも、お互いの教案や教材について相談しあい、常に全体の中で自分の授業を考えるようにした。

また、Aクラスは1名が主で教えるときは、もう1名は観察にまわるというスタイルをとった。観察にまわった実習生は授業をビデオ撮影し、教師である実習生の教授行動について学習者の反応も合わせて観察記録をつけ、授業後お互いにフィードバックを行った。

#### 4.2.2 クラス目標

Aクラスの目標はすでに、それぞれの学習者がある程度の水準に達していたので、「より高度な日本語の使い手になる」という全体の目標を設定した。日本語の総合的な力を高めるとい目標ではあるが、4技能を短期間で同等の比重で扱うのは無理であるため、次のような下位目標を立て、それぞれの技能での到達目標を決定した。

- 会話能力
- ・日本語で議論できるようになる
  - ・会議の場で日本語でプレゼンテーションできるようになる
  - ・話を自分のペースで進められるようになる
  - ・スピーチスタイルをシフトできる（公私場面での切り替え）
- 読解能力
- ・新聞の記事に目を通して内容を相手に伝えたり、感想を述べたりする

(スキヤニング・スキミング・大意をつかむ)

聴解能力 ・あるテーマに基づいたテレビ番組を見て、その内容について理解する

(未習の語彙にとらわれず概要をつかむ)

文章表現 ・誘いのメールを目上の人にもらった場合、失礼がないように断りの返事(メール)が出せるようになる

なお、日本語能力試験対策の要望もあったが、コース全体の目標には組み込まず、授業後自由参加の時間として設けた4限(15:15~16:15 60分)の「Free Question Time」での個別対応とした。

### 4.2.3 学習者

Aクラスの学習者4名は民間派遣会社所属である。うち3名は同じ会社に属していたため、すでに顔見知りであった。4名全員がカリキュラムが設定された学習機関で勉強した経験があり、フォーム変換などの基礎的な部分が構築されていたので、文法説明などに多くを割く必要はなかった。語彙(漢字)の量については日本語専攻の学習者Bが最も多く、使用語彙、理解語彙も多かった。学習者Cは大学での専攻が英文学、中国文学だったことと、日本に来てから中国語を語学学校で勉強していることもあり、漢字については日本語読みはできなくても見れば意味がわかり、それが日本語学習時の強みになっていた。以下に個別のプロフィールを記す。

表7 Aクラス学習者プロフィール

学習者	国籍	性別	滞日 期間	学習 歴	学習機関 ①自国で ② 来日後	級 ※	①ALT 歴②過去 実習参加
A	カナダ	男	3年	7年	①大学の第二外国語(3年) ②独学③ボランティア教室	3 (2)	①1年半②2005 年度にも参加
B	アメリカ	男	4年	7年 半	①専攻日本語・日本文学 ②日本語学校	1	①2年め②初参 加
C	アメリカ	男	4年	4年	②日本語学校(集中・選 択)・ボランティア教室	— (1)	①1年②2005年 度にも参加
D	アメリカ	男	3年	4年	①会話教室 ②日本語学校(6か月)	— (2)	①4ヶ月②初参 加

※級の上段は「日本語能力試験」の取得級。( )内に入っているのは今後受験予定の級。

<報告担当 4.1-4.2.3 田中典子>

#### 4.2.4 学習者のニーズ・レディネス

クラス運営にあたり、Aクラスの学習者のニーズとレディネスの詳細を学習者別にまとめ、それを基に4.2の学習目標を設定した。学習者別のニーズとレディネスのまとめを簡略化したものを以下の表に示す。

表 8 Aクラス：ニーズレディネス表

学習者	ニーズ	レディネス
A	<ul style="list-style-type: none"> <li>学校の会議を聞いて理解できるようになりたい。また、会議で配布される資料を読めるようになりたい</li> <li>漢字を学習したい。意味の似ている漢字を区別したい。(より多くの漢字の習得、意味の区別、書き取り)漢字の効率的な学習方法を知りたい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本の教科書を使用し学習</li> <li>普段はあまり書く機会がない。</li> <li>注意書きなどやテレビの字幕は読める。</li> </ul>
B	<ul style="list-style-type: none"> <li>通訳か翻訳関係の仕事をするための総合的な日本語能力をさらに高めたい。</li> <li>日本語能力試験1級に合格したが、その後どのような学習を行えば目標に到達できるか、その足がかりとなるような学習を希望</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li><b>Japanese for Everyone</b> をはじめとし、他テキストも学習。</li> <li>大学での専門が日本語ということやインターンシップで日本に訪れたこと、滞日経験も長く、会話はほとんど問題ない。</li> </ul>
C	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語の能力の1級を受験するため、漢字や語彙、敬語の練習を希望。</li> <li>日本の大学院に進学し、日本語教育を専攻したい。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語学校作成のテキスト、『完全マスター1, 2級』既習。</li> <li>書く力が弱いと自覚し、日本語学校で書く練習をしている。また、日本語能力試験の1級、読解も日本語学校で学習中。</li> <li>週1回ボランティア教室に参加</li> <li>去年のコースにも参加</li> </ul>
D	<ul style="list-style-type: none"> <li>書く力と読む力を伸ばしたい。特に読む力に重点を置きたい。語彙も増やしたい。</li> <li>能力試験2級の勉強をしたい。</li> <li>授業で英語で説明したあと、学生の反応を見て日本語で説明するときもある。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>漢字は初級レベル</li> <li>『みんなの日本語1, 2』既習。</li> </ul>

#### 4.2.5 シラバス

	8/7 (月)	8/8 (火)	8/9 (水)	8/10 (木)	8/11 (金)
1 限 10:00 ～ 11:10 (70分)	★A・B 合同 オリエンテーシ ョン	担当：田中 <b>会話</b> 「依頼する/断る /受ける」	担当：服部 <b>討論 1</b> 「小学校での英 語必修化」 ・語彙 ・VTR	担当：服部 <b>会話</b> スピーチスタイ ルを変える 10:00-10:30 (※30分授業)	10:00 ～ 11:30  防災センター・ オプションルツ アー
10 分 休憩					
2 限 11:20 ～ 12:30 (70分)	担当：服部 <b>会話</b> 体験談を話す	担当：服部 <b>読解</b> 要約し、感想を述 べる	担当：服部 <b>討論 2</b> 「小学校での英 語必修化」 ・表現 ・ディスカッション	担当：田中 「新しいスタイ ルの授業提案」 4-4《発表と質疑 応答》 10:40-11:00 (原稿チェック) 11:00-12:30 (発表会)	
60 分 昼休み					
3 限 13:30 ～ 15:00 (90分)	担当：田中 「新しいスタイ ルの授業提案」 4-1《企画》	担当：田中 「新しいスタイ ルの授業提案」 4-2《資料作成》	担当：田中 「新しいスタイ ルの授業提案」 4-3《プレゼンテ ーションに必要 な日本語》	★A・B 合同 <b>防災講義</b> ーいのちを守る ー今からできる こと	
放課後	※Free Question Time			<b>ティ ー パーティ</b>	

※ニーズ調査の際、Aクラスで能力試験対策や漢字を学習したいとの希望を述べた学習者については、Free Question Timeという時間を設け、個別対応とした。<sup>18</sup>

<sup>18</sup> 初日には4人全員が残ったので、能力試験対策のテキストや漢字学習用のテキストの紹介などをした。次の日からは授業後話したいことがある人のみ利用するという程度にとどまった。

#### 4.2.6 テキスト

テキストは、クラス目標、シラバスを立てた後、教案と平行してテキストを作成した。Aクラスには上級レベルの学習者が所属していたため、より高度な日本語を習得するための材料として、主に生教材を用いた。テキストは授業担当者がそれぞれの担当内容に従って準備した。教材作成のため使用した資料等については4.2.7の「授業内容」に記載する。

#### 4.2.7 授業内容

##### 4.2.7.1 2006年8月7日

2006年8月7日	2限目	担当：服部明子
学習項目		
体験談を話す ・順を追って話すことと、詳細な説明をすることで、聞いている人が分かりやすいと思えるように話す。		
授業の流れ		
I. ブレーンストーミング 話の進め方や話をする時に気をつけていることなどについて話し合う。		
II. 表現の確認 実習生成成のプリントを基に、体験談を話す時、どのような表現があるかを確認。		
III. 体験談を話す サイコロを使って話題を決定し、学習者1人ずつが体験談を話す。 全員話し終わったところでフィードバック		
IV. 全員での会話		
反省		
初日の最初の授業ということもあり、学習者の状況を探りながら授業を行った。まず、考えなければならないのが授業内容の立て方である。目標が反映され、学習者の意識を促すものであったかという点については、検討する必要があった。また、授業前に予想していた以上に学習者の日本語のレベルが高く、既にできていたことを確認する授業になってしまったため、学習者の達成感が薄かったのではないかと思われる。 授業では「日本語で話すとき、どんなことに気をつけていますか」など、抽象的で答えるのに難しい質問を投げかけてしまう場面があった。Aクラスの学習者は言語習得という		

側面にかなり意識の高い学習者であったため、様々な意見が出されたが、こうした問いは実際非常に困難であり、授業中の導入段階で提出してしまったことについては反省すべきであろう。さらに、授業中は1人が話している間、聞き手に明確な役割が与えられていなかった。実習生は聞き手に対し、他の学習者の体験談を聞き、フィードバックするよう指示したものの、意識的に聞くためにチェックリストなどを準備しておくべきであった。

2006年8月7日	3限目	担当：田中典子								
学習項目										
<p>「新しいスタイルの授業提案」第1回 プランを練る</p> <p>この授業は最終的に会議でプレゼンテーションをするという能力を身につけることを目標とする4回連続授業である。第一回目はそれぞれの担当する学校の英語教育を振り返り、補いたい部分を新しい授業として学校側に提案するという前提で企画を決める。特定の文法項目や表現を学ぶための授業ではなく、日本語でタスクをこなしていくことを目的にするタスクシラバスである。</p> <p>&lt;予定&gt;</p> <table border="0"> <tr> <td>第1回</td> <td>プランを練る</td> </tr> <tr> <td>第2回</td> <td>企画書を作る</td> </tr> <tr> <td>第3回</td> <td>発表練習 ー発表のための日本語ー</td> </tr> <tr> <td>第4回</td> <td>発表会 ー実際の発表と質疑応答ー</td> </tr> </table>			第1回	プランを練る	第2回	企画書を作る	第3回	発表練習 ー発表のための日本語ー	第4回	発表会 ー実際の発表と質疑応答ー
第1回	プランを練る									
第2回	企画書を作る									
第3回	発表練習 ー発表のための日本語ー									
第4回	発表会 ー実際の発表と質疑応答ー									
授業の流れ										
<ol style="list-style-type: none"> <li>I. まず4回連続授業で何を目標しているかを説明する。</li> <li>II. 各ALTの学校の英語教育および、ALTである学習者の授業提案の経験の有無について4名に尋ねる。</li> <li>III. 文部科学省が中学校の英語教育で目指していることをその報告書を見て確認し、ALTが求められている役割を確認する。</li> <li>IV. 今の英語教育の授業で足りないものは何か。企画するとしたらどのようなものを企画したいかを話し合う。</li> </ol>										
反省										
<p>授業冒頭にこの連続授業で目指すことを「学校側に普通の授業スタイルではなく、違った形での英語学習の試みを提案する」ことだと提示した。一種のシミュレーションタスクであり、この連続授業での到達目標は会議で提案とプレゼンテーションをするための一連の日本語を使いこなせるようになることだと説明した。</p> <p>それぞれの学校で、授業でやりたいと思ってもできないことは何か、どんな制約がある</p>										

からできないのかについて考えてもらい、それらが解決できるとしたらどんな企画を提案するか考えるというのが当初の授業の予定であった。実習生はブレインストーミングのための日本語表現を導入する目的で「人の意見を聞いて自分の考えを深める」というタイトルで、コメントをするための表現と当日配布のプリントに出てくる漢字に読み方を書いた語彙シートを用意した。

しかし、冒頭から想定外の答えが学習者から返ってきたため、授業計画を急遽変更せざるを得なくなった。それは、彼らが授業で組んでいる日本人英語教師にすでに自分で考えた授業提案をしていることと、教師によってALTに求める役割は様々であるため、そのような提案が歓迎されることもあれば受け入れられず無力感を感じることもあるという現状だった。実習生が考えていた「普通の授業ではできない大きなプロジェクトワークを考えて提案する」という内容は、普通の授業での提案もままならないのに、そもそも彼らには学年会議のような全体の場での提案のチャンスが与えられていないというところで大幅にずれており、好感触が得られなかった。結果、実習生は舵取りの方向を変え、焦点を日本の英語教育の問題点を掘り下げることシフトした。

資料として用意した文部科学省初等中等教育局の『「英語が使える日本人」の育成—文部科学省の英語教育への取り組み—』は当初補助資料として準備したものだったが、まずはこれを丁寧に見ていくことにした。

資料を見ながらそれぞれの学校での問題点などを学習者に随時質問していく形の授業進行になった。

反省点としては、実習生が勝手に想定した学習者の目標言語活動が現実のものと合致しておらず、何をしている授業なのかがわからなくなったことである。学習者が積極的に発言してくれたため、英語教師側からの日本の英語教育の問題点などを議論するという内容に落ち着いたが、用意してきた表現シートは不要になったため、随時学習者の語彙を拾うことと、学習者の発言を趣旨に沿うような日本語に直すことに気を配った。また、発言の機会が均等になるように意見を求めていった。学習者の発言に対しては内容面と表現面の2つに注意を払ってフィードバックしていく必要があり、内容重視、学習者中心主義の授業の難しさを感じた。

#### 4.2.7.2 2006年8月8日

2006年8月8日	1限目	担当：田中典子
学習項目 「お願いできませんか」		
許可、依頼に関わる表現について会話とメールという2つの軸で取りあげる。		
①「会話」依頼する・断る・受ける		
親疎の度合いや場面でスピーチスタイルを変える		

- ②メールでの依頼文に断りの返事を書く  
フォーマルな文面で断りが書けるようにする

#### 授業の流れ

##### 【前日 宿題】8月7日の3限終了時

「英語主任の先生からの依頼メールを受け取り、それに対する返事を書く」という宿題を課す。先生からのメールはプリントして手渡し、趣旨を説明する。宿題の提出方法は8月7日中に実習専用のアドレスに実際にメールで返事を書くという形にした。

-----

##### 【当日の授業進行】

時間配分としては会話 75 分、宿題のフィードバックは後半に配置し、メールの書き方 15 分とした。

#### <会話>

- I. お願いするという言語行為を物を借りるという場面に絞り、実際にどのような物を借りたことがあるか、現実での場面を提出してもらう。
- II. 親しい間柄での物の貸し借りを兄弟に設定し、2組に分かれ、ロールプレイをする。設定については予めテキストにして渡す。1組ごとに発表が終わった時点で実習生からフィードバック。
- III. 次に、上下関係がある場合の頼み方を練習するために育児休暇を求める部下と、それに応答する上司のロールプレイをする。(2)同様 1組ごとに発表が終わった時点で実習生からフィードバック。
- IV. まとめとして実際の例としてテープを聞き、語彙表現について学習者がわからないものを取り上げ板書する。

#### <メールの返事を書く>

- V. 前日出した宿題の4人の回答と、改善したほうがいい点をプリントにまとめてそれを見ながら順番にコメントしていった。見本の返信例も提示して、どのような構成で断り文を出すのかについて説明した。

#### 参考資料

梶本総子・宮谷敦美(2004)『聞いて覚える話し方日本語生中継中～上級編』くろしお出版  
山内博之(2005)『OPIの考え方に基づいた日本語教授法—話す能力を高めるために—』ひつじ書房

## 反省

### <会話>

会話の授業については、実習生が提出した場面は、彼らの教室外での言語活動に即していなかった。日本語での会話の必要性を考えればもっと違う場面にするべきであった。ロールプレイ後提示しようと考えていたモデル会話（テープ）と同様の場面にするようにこだわったあまり、ロールプレイの本質を見失った。大いに反省すべき点である。

また、学習者の性格から考えて、録音してのフィードバックを恥ずかしがるタイプではなかったので、思い切って、その場で録音して、全体で聞きなおしてからフィードバックをすればそれぞれの気付きや苦手とするところを意識化できるよいタスクになったと思う。実際は実習生が彼らのロールプレイの最中に気になるところをメモし、それについてあとでフィードバックしたので、教師側からの一方的なコメントになってしまい、全体で考えることができなかった。ロールプレイをすることだけで終わらず、自己及び他者の言語活動を観察することで癖を直したり新しい表現を学ぶ機会にまで授業をひきあげることをこれからの課題としたい。

救いだったのは、そのような実習生のミスにもかかわらず、学習者はそれぞれの役になりきり、会話を進めてくれたこと、疑問に思ったことを積極的に質問してくれたことである。どんなことから学ぼうとしてくれる A クラスの学習者に大いに助けられた。

### <メールの書き方>

今回事前調査で 4 人の学習者の通信環境・パソコンが自宅に整っていることがわかっていたので、メールで宿題のやりとりをすることにした。これは課題をメールで返事を書くというものにしたので、実際のコミュニケーションのスタイルに近づけるためである。また、課題設定の意図はこれから仕事の連絡なども日本語のメールで来るだろうと予測され、そうしたときにコミュニケーションスタイルで誤りを犯さないように、練習する必要があるためである。友達同士のメールであれば、彼らの日本語レベルならそれほど問題もないし、相手も寛容で細かいことは気にしないと考えたので、状況的には「婉曲的に断る」という機能に的を絞った。実際、話しているときは丁寧なのに、文章を書いたときにとってもフレンドリーになる学習者もいて、そうした点を指摘できたことでこの課題の目標は達成できた。

2006 年 8 月 8 日

2 限目

担当：服部明子

### 学習項目

#### 読解

- ・スキミング。新聞記事を読んで大意を掴むことができる。

## 生教材資料

- ・育児支える短時間勤務：朝日新聞 2003 年 2 月 18 日
- ・何でもランキング 夫・妻の実家で心がけること：日本経済新聞 2006 年 7 月 22 日

## 授業の流れ

### I. 事前準備（前日：8月7日）

前日に読解教材を配布。3 種類の読解教材(両面印刷で振り仮名のあるものもないもの)を用意した。2 名ずつに分かれ、3 種類の読解教材の中から興味のあるものを 1 つ選択してもらおう。予習はしなくてもよいが、不安であれば分からない語句を調べてくるよう指示。

### II. 読解：内容確認

- ①授業の目的と読み方(スキミング)を説明。記事中の基本的かつ重要な語句のみクイズ的に確認。
- ②読む時間を全員で設定し、一度読む。
- ③読解シートを配布し、同じ教材を読んだ 2 人 1 組になって、自分たちの読んだ記事の内容を確認する。

### III. 情報交換

違う記事を読んだ他の学習者に自分が読んだものについて説明する。聞き手にはチェックシートを用意した。聞き手は質問などを加えながら、意味を理解し、説明の分かりやすさや質問に対する答えが適切であったか、どのような情報を得たかなどについてチェックシートに記入。

### IV. 全体確認

- ①2 名が代表でそれぞれ読んだ記事の内容を要約。
- ②全員で印象的だった記事について、意見交換。

## 反省

A クラスのニーズを調査した際、読解を学びたいという意見が多かったため、それを反映させた授業を行った。授業前に、話すことについては学習者の間の差はそれほど大きくないが、読解ではその差が大きいのではないかと予測し、ピア・リーディングの方法を参考にした読解授業を行うことを決めた。また、前日の反省を生かし、聞き手にはチェックシートを準備した。

授業では、それぞれの学習者が協同して教材を理解することができた。しかし、実習生からのフィードバックをする場面が非常に少なかった。また、全体確認の際、学習者から様々な意見が出るかと思っていたが、記事を読むことで精一杯だったせいも、それほど活発な意見の交換が見られなかった。

準備した資料は読解に慣れていない学習者にとって、70 分という制約の中で行う作業としては難しかったようだ。時間をかけて行えば意味のある学習となっただろうが、消化

不良となってしまった部分も否めない。レベル差のあるクラスでどのように読解授業を行うかは今後の課題とし、再考する必要がある。

2006年8月8日

3限目

担当：田中典子

#### 学習項目

「新しいスタイルの授業提案」第2回 企画書を作る→下記のように変更

初回の授業で日本の学校の英語教育の問題点について話したが、それをまとめ、それらが何に起因するのかをさらに掘り下げる。

また、当初の計画とは内容がずれてきたため、学習者の意向も聞き、残り2回の授業の方向を決定する。

#### 授業の流れ

- I. 8月7日の話し合いで出てきた様々な問題点をリストアップしたプリントを渡す。
- II. 現場の教育でコミュニケーション力を高めるための新しい試みを阻むものはなんであるかを、自分の経験に基づいてさらに話し合って深める。問題点の原因についても意見を述べる。
- III. この授業の最終目標について4人のコンセンサスを取り、軌道修正をする。  
実習生が挙げた案は以下の2案である。
  - ① あくまでも企画をするための日本語にこだわり、学校という枠をはずした別の場所で自分が主体になって提案するという目標に切り替える。
  - ② それぞれが一番興味をもったテーマでスピーチをする。  
→結果、②に決定し、最終日はスピーチをすることになった。テーマを考えてくることを宿題とし、3回めの次回はスピーチ構成を考えることにした。

#### 反省

研究レポートで詳述したが、連続授業のタスクの立て方がニーズに合致していなかったため、本来なら企画書を作るという明確な学習目標で動く回だったが、手探りで進むという結果になった。

ただ、日本語を使うために架空の設定の中で話すということが避けられ、現実の問題、彼らがALTのミーティングでは英語で話しているだろう内容を日本語で議論することができた。最終的にはこのような話題は学校で校長先生、教科主任、同僚の英語教師と話すことが考えられるので、そのための語彙の厚みを増すことには貢献できたと思われる。

アンケートではこの授業では語彙を学んだと回答したものが2名、語彙とコミュニケーションストラテジーが1名、日本の文化、条件（社会的制約のことか？）と答えた学習者が1名だった。発話の機会、考える時間ともに4名が多かったと回答していた。コメント

に「すごいおもしろい」と書いてくれた学習者が1名いたが、やはり内容が自分が直面している問題について話せたということが、満足度を高めたのだと思う。

#### 4.2.7.3 2006年8月9日

2006年8月9日	1・2限目	担当：服部明子
学習項目		
討論		
・事実と意見を分け、聞き手を意識した話し方ができる。		
・相手の意見に対し、自分の意見との一致する点、異なる点が述べられる。		
生教材資料		
・クローズアップ現代 動き出した小学校英語：NHK2006年5月16日放送(30分)		
参考文献		
梶本総子・宮谷敦美(2004)『聞いて覚える話し方日本語生中継中～上級編』くろしお出版		
斉山弥生・沖田弓子(1996)『研究発表の方法～留学生のためのレポート作成・口頭発表の準備の手引き～』産能短期大学国際交流センター 凡人社		
安藤節子他(2001)『トピックによる日本語総合演習 上級』スリーエーネットワーク		
授業の流れ		
I. 事前準備 (前日8月8日)		
宿題として、ワークシートと語彙シートを配布		
1限目		
II. 宿題の確認		
III. ディスカッションの方法について説明		
IV. 討論を進める際の表現や文法事項を確認し、それらについての練習問題を行う。		
V. ビデオを見る		
スキニングを指示。後で討論することを念頭に、各自が意見を考えながら見ることができるとよいことを伝える。また、どのような事実が取り上げられていたかを討議で用いるため、メモを取ることを指示しメモ用紙を配布。ビデオは15分で一端止め、確認しながら見る。ビデオを見終わったら、理解のための内容要約のプリントを配布。		
2限目		
VI. テーマと議論の焦点を明確化		
VII. 進め方の説明とデモンストレーション		
VIII. 全体討論		

## IX. フィードバック

### 反省

学習者にとって身近な話題だったためか、討論はかなり盛り上がった。実習生が準備した表現や進め方のシートなどもうまく活用することができた。

しかし、テーマと全体的な構成がかみ合わないものもあった。学習者からの問題意識を重視したいと考え、その場その場で瞬間的に判断し、授業を進めたが、後になってそのテーマのずれが目立ったものもあったため、ブレインストーミングを行う際に、実習生から何について話すのか、どのような構成で話すのかを提示する方法もあっただろうと思われる。いずれの方法を取るにしても、早い段階でそうした問題を解決しておくべきだった。

4人という少ない人数だったため、最後の全体討論の際には実習生が司会となった。しかし、最後にフィードバックをかねたまどめが実習生主導になってしまい、討論が盛り上がっていたのに学習者が話す時間が少なくなってしまった。見学の鷺見先生にも指摘されたが、時間との兼ね合いも含めて自分の役割を認識しておく必要があった。

2006年8月9日

3限目

担当：田中典子

### 学習項目

各自最終日にするスピーチ内容の決定をする。

初めにスピーチのテーマを決定した後、スピーチ用のフォーマルな表現を学ぶ。スピーチの基本的な構成を枠組みとしてこちらから提示し、内容についてさらに詳しく考える。

全体のテーマは『ALTの立場から見た日本の英語教育』とした。

### 授業の流れ

I. 授業開始段階ではスピーチの内容が決まっていなかったため、まず2日間であがった英語教育の問題点のうち印象に残っているものを言ってもらい、実習生がそれを板書しながらクラス全体で整理していった。

II. 学習者は話しながら自分が話したいテーマがあったら、自分がやると宣言していく。

III. 4名のスピーチのテーマが決定した後、「スピーチをするために」と題した実習生が作成したプリントでスピーチの構成と表現を確認していく。この間は実習生の一方的な説明になった。

IV. 表現シートとは別に各学習者用に構成を考える書き込みシートを渡し、10分時間を取り、それぞれプランを練ってもらった。一人はIIIで出てきた日本語の表現・語彙について実習生に確認を求めてきたので、巡視の大半はその質問に答えることに費やした。残りの3人のうち一人は日本語でプランをたてていたが、あとの2人は英語で下書きをしていた。また、その2人は英語で相談しあい、日本語の表現については授業見学に入っていた鷺見先生およびもう1名のAクラス担当実習生に質問をして確認をしていた。

V. 現段階で自分が話そうとしている内容について発表し、それぞれ助言をしたり、意見を言い合って内容を深めた。

VI. 発表の時間構成を決定して授業を終了した。

#### 参考資料

齊山弥生・沖田弓子(1996)『研究発表の方法～留学生のためのレポート作成・口頭発表の準備の手引き～』産能短期大学国際交流センター 凡人社

安藤節子他(2001)『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 中級後期』スリーエーネットワーク

佐々木薫他(2001)『トピックによる日本語総合演習 テーマ探しから発表へ 中級前期』スリーエーネットワーク

#### 反省

テーマを決めていく段階では、早い段階でテーマを決めたある学習者が非常にうまく場をコントロールし、残りの3人が決めやすいように話の流れを作ってくれた。彼らはこのような話し合いについては文化的に培われたものを持っているので、だれも意見を言わずに黙ってしまうというような日本人の学生には一種起こりがちな停滞もなく、こちらのほうが学ぶことが多かった。

見学に入ってきた鷺見先生より、授業後実習生の授業について教師主導の側面が強い授業だと指摘を受けた。4人のクラスと20人のクラスでは授業のやり方も違っていたが、実習生は後者での経験にひきずられ、学生に委ねすぎることによって不安を感じてしまうので、学習者に合わせた柔軟な対応ができるように自分を訓練していかなければならないと感じた。

授業と授業の関連については、今回2人の実習生でAクラスを担当したが、語彙や内容が重なる部分が多いとあり、一方で学んだことを他方で生かせるという関連が強く、相乗効果を生むことができてよかった。

#### 4.2.7.4 2006年8月10日

2006年8月10日	1 限目	担当：服部明子
学習項目		
会話		
・スピーチスタイルを変える		
・ことわざ		

## 授業の流れ

### I. プレーンストーミング

話し相手によって話し方はどう変わるか、普段変えているか、どのような表現で誰に対して変えているかを質問し待遇表現を意識化。敬語を使うよう提案。

### II. ことわざクイズ

## 反省

前日に授業時間を 30 分に設定し直した。シラバスを立てた時点では、スピーチスタイルのシフトの練習として、様々な設定でのロールプレイを考えていたが、30 分という短い時間ではできることも限られているため、学習者のうちの何人かが興味をもった「ことわざ」を取り上げ、それについて敬語を使用しながら話し合うことを授業の最初に述べた。

しかし、敬語などの待遇表現は「いつ」「だれに」「どのような状況下」で使うことに意味があるのであり、こうした練習内容は全く滑稽である。基本的な間違いに、授業開始後すぐに気づき撤回したものの、学習者にとっては少なからず不信感が残っただろう。

敬語の学習については、ニーズ調査でもかなり大きな部分を占めていた。そのため、時間的制約や予測していなかった事態にあっても、本実習では確実に正面から取り上げる必要があった。しかし、中途半端に多くの内容を取り扱おうとした結果、結局取り上げることができなかった。このことに関しては非常に反省している。時間を有効に使うのであれば、口頭ドリルやフォーム練習を 30 分きちんと行うだけでもよかっただろう。状況判断力が低下している時にも、常に「この練習は何のために行うか」という視点を忘れないようにしたい。

2006 年 8 月 10 日

3 限目

担当：田中典子

## 学習項目

4 日間学んだことの総大成としてスピーチ発表をする。持ち時間は一人スピーチ 7 分及び質疑応答 8 分の計 15 分で、聴衆の前でスピーチをする。

聴衆としての参加を実習生と発表者の学生以外に本研究科の大学院の先生、大学院生に協力お願いし、6 名の方に参加していただいた。また、聞き手にどのように伝わったかを学習者に形として残るように、聴衆の方には質疑以外にスピーチ評価シートの記入の協力をお願いした。

## 授業の流れ

I. 司会者（実習生）がスピーチ大会の趣旨と各学習者のテーマ、氏名を紹介する。聴衆の方に評価シートを配布、書き方を説明し、記入をお願いする。

II. 4 名が順番にスピーチ発表をする。

III. 授業終了後、スピーチ評価シートを回収、学習者に翌日渡す。

## 反省

一人目は持ち時間内にスピーチ・質疑応答を終えたが、以降の発表者については15分を越えた。あえて時間を厳しく制限しなかったのは、せっかくの機会なので、質疑応答が活発に行われているときに中断を避けるという配慮をしたためである。ただ、このように延長する傾向はAクラス担当の実習生2名ともにあり、最後の全体アンケートで理解を示しながらも時間を守らなかったことについてコメントした学習者もいたので、「せっかくだから」という意識だけで動いてはいけないと感じた。

当初の予定とは内容が変わってしまったが、最終的には発表という形で終わることができてよかったと思う。ただ、方針変更について実習生の判断が遅かったため、スピーチの準備については十分であったとは言えなかった。発表直前の授業(もう1名の実習生担当)を予定より短縮し30分にしてもらい、スピーチの原稿チェックに休憩時間の10分を入れて合計30分をあてさせてもらったが、3名の下書きの日本語を限られた時間でざっとチェックするにとどまり十分に推敲できなかった。また、下書きをしていない1名についてはノーチェックになってしまった。彼は臨機応変にその場で表現集を見ながら話すタイプだったので、その都度授業で習ったことも取り入れながら話していたが、その場で初めて聞く人の中には少し流れが悪いと感じた人もあったようだ。

また研究レポートでも触れたが、発表を最終的な目標とするより、フィードバックまでを授業の中に組み込んだ構成にしたほうがAクラスの学習者にとってはより実りが多いものになったのではないかと思う。短期集中の、継続がないコースだからこそやるべきこと、できることは何かについて省みることができた大変密度の濃い4日間だった。

### 4.2.8 Aクラス全体の反省

事前インタビューを実施し、学習者のニーズやレディネスを把握した上で、検討に検討を重ねて行ったコースであった。しかし、コース開始後は、時間的制約から予定していた内容がおさまりきらないこともあった。また、シラバスを変更することもあった。

事後アンケートでも示されたが、Aクラスの学習者は更に学習を進め、高度な日本語能力を身につけたいと考えている。学習者は学習年数も長く、滞日経験も長い。何より、日本語学習に対して高いモチベーションを持っている。学習者それぞれが、将来的にも何らかの形で日本語に関わっていきたく強く希望している。そのため、Aクラスの学習者は、学習内容に対する要求が高かった。実習期間を通して、教師側にはそうした要求に応える能力が求められているということを改めて実感するとともに、それぞれの授業で得た反省を生かし今後さらに改善の必要があるということを確認した。

<4.2.4-4.2.6 および 4.2.8 報告担当 服部明子・4.2.7 報告 各授業担当者>

## 4.3 Bクラス

### 4.3.1 担当実習生

中島忍、許恵ブンの2名が担当した。ニーズレディネス分析から学習目標を決定し、シラバスデザインを行い、各自の担当する授業にあたる教案と教材を作成した。コース開講前は常に相談しあいながら作業を進め、コース開講中でも教案と教材の不備を共同で修正した。

また、Bクラスは1名のメイン教師と1名のサブ教師というスタイルをとった。メイン教師は主に授業を行う役割で、サブ教師はメイン教師のフォロー、学習者のチームワークの参加、ビデオの撮影を担当した。1日の授業が終わったら、常に二人でその日の反省と翌日の準備を行った。

### 4.3.2 クラス目標

大きな目標：日本語を使って生活できるようになる。

これは、日本語ができなくてもどうにか暮らせる環境にある今回の学習者たちが、これまで英語で済ませてしまっていた生活上のやりとりを、日本語でこなせるようになることを大きな目標としたものである。

具体的には、

話す力：①英語ではなく、日本語を使う。

②日本人と日本語でコミュニケーションを取る。

読む力：看板、お知らせの日本語が読める。

聞く力：自分に必要なインフォメーションが聞ける。

話す力は、ほとんどの学習者が必要としていたように、生活上、必要不可欠な力であるが、それに加えて、街角の看板や、ポストに入っているマンションのお知らせなどを読む力、さらに日々受ける多くの情報の中から自分が必要としているインフォメーションを聞く力をつけることを目標としている。

### 4.3.3 学習者

Bクラスの学習者は5名で、1名が女性であった。1名がJETプログラムの、他の4人は民間の派遣会社、(株)アルティアセントラルのALTであった。その他、各学習者の属性については、下の表を参考にしていきたい。

表9 Bクラス学習者プロフィール

学習者	国籍	性別	滞日 期間	学 習 歴	学習機関 ①自国②来日 後	級	①過去実習参加 ②その他
						※	
E	アメリカ	女	1年3 ヶ月	1年6 ヶ月	①なし ②ボランティア教室、独学	(3)	①初参加 ②
F	アメリカ	男	3年6 ヶ月	なし	①なし ②ボランティア教室でサ バイバル日本語		①初参加 ②
G	イギリス	男	1年	1年	①独学 ②日本語学校		①2005年度にも 参加 ②ALT歴：1年
H	イギリス	男	3年3 ヶ月	3年3 ヶ月	①なし ②ボランティア教室、日本 語学校、独学	(3)	①初参加 ②
I	カナダ	男	2年	なし	①なし ②なし		①初参加 ②

※級の上段は「日本語能力試験」の取得級。( ) 内に入っているのは今後受験予定の級。

### 4.3.4 学習者のニーズ・レディネス

Bクラスの学習者のニーズは、ほとんどの学習者が会話を勉強したいとしていたが、レディネスについては5人5色、幅が大きいことが特徴的であるといえる。詳細は学習者別  
に書き出した次の表を参考にしていきたい。

表 10 Bクラス：ニーズレディネス表

学習者	ニーズ	レディネス
E	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語能力試験 3 級取得に向けた勉強（文法・漢字）をしたい</li> <li>話す練習をしたい</li> <li>郵便物を読みたい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語の学習は、去年 1 年間日本で勉強している</li> <li>「みんなの日本語」30 課まで終わっている。別の所で 26 課までもう一通りやっている</li> </ul>
F	<ul style="list-style-type: none"> <li>何を勉強したいか、又、すれば良いかわからない</li> <li>配偶者が英語堪能のため、日常生活で日本語を必要とする場面がないようであった</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ボランティア教室でサバイバル日本語（簡単な日本語）を学んだのみ</li> <li>文字（ひらがな、カタカナ、漢字）は書かない、読まない</li> <li>耳型の学習者で話せる日本語は少ないが、発音はきれい</li> </ul>
G	<ul style="list-style-type: none"> <li>友人と日本語で話したい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>書く練習はあまりしておらず、日常生活では友人にメールを書く程度</li> </ul>
H	<ul style="list-style-type: none"> <li>日本語能力試験 3 級取得に向けた勉強（文法・漢字）をしたい</li> <li>話す練習をしたい（聞いて理解するが、自分の意見を言うのが難しい、軽い挨拶だけではなく、長い会話もできるようになりたい）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>「みんなの日本語」Ⅰ・Ⅱ終了</li> <li>漢字は読めるものもあるが書けない（パソコンなどで選択する能力はある）</li> </ul>
I	<ul style="list-style-type: none"> <li>4 技能すべて勉強したい</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>どこかの機関で勉強したことはなく、日本人の友達に教えてもらう程度。耳型の学習者で、話せる日本語は少ないが、発音はきれい</li> <li>ひらがな・カタカナはゆっくりなら読める、漢字は少しなら読める</li> </ul>

#### 4.3.5 シラバス

	8/7 (月)	8/8 (火)	8/9 (水)	8/10 (木)	8/11 (金)
1 時間目 10:00 ～ 11:10 (70分)	★A・B 合同 オリエンテ ーション	担当：許 待ち合わせ →トラブル のときどう しよう	担当：中島 ①お願いす る ②断る	担当：許 私の好きな もの/宝物	10:00 ～ 11:30  防災センタ ー・ オブショナ ルツアー
10 分 休憩					
2 時間目 11:20 ～ 12:30 (70分)	担当：中島 なめらかな 会話のため に	担当：許 ①レストラ ンでのハ プニング ②買い物を する	担当：許 身近な紙を 読む	担当：許 聴解問題 (平 成 10 年度日 本語能力試 験 3 級) を解 く練習	
60 分 昼休み					
3 時間目 13:30 ～ 15:00 (90分)	担当：許 ①誘う・約束 する ②変更する	担当：中島 ①返品する ②慣用句	担当：中島 ①文句を言 う ②伝聞「～そ うです」	★A・B 合同 地震のため に	X
放課後	Free Question Time <sup>注2</sup>			ティー パーティー	

注 1：★印は A・B 合同授業である。

注 2：ニーズ調査の際、日本語能力試験の勉強をしたいという要望が多かったので、試験に関連する質問などには Free Question Time を利用してもらうことにした。

#### 4.3.6 テキスト編集

テキストは、クラス目標、シラバスを立ててから、教案を作成するのと平行して編集した。従って内容は、授業で取り上げる（と予定した）もののみを集めたものになっている。文法を説明するような部分はないため、読んで理解を深めるというものではなく、ワークシートに近いものである。英語での解説や注釈は、単語レベルのみである。参考にした教科書、文献は、以下の5点である（各書籍の詳細については2.4を参照）。

- ・日本語生中継聞いて覚える話し方 中・上級
- ・日本語生中継聞いて覚える話し方 初・中級
- ・なめらか日本語会話
- ・日本語を話すトレーニング
- ・日本語を書くトレーニング

#### 4.3.7 授業内容

##### 4.3.7.1 2006年8月7日

2006年8月7日	2限目	担当：中島忍
学習項目		
「なめらかな会話のために」【テキスト p1～p4】 自然な会話のためのスキル（聞き返し、考えているというサイン、フィラー、不賛成のサインなど）を身につける。		
授業の流れ		
I. ウォーミングアップ ①クラス名を決める→「きゃっきゃさる」に決定。【5分】 ②自己紹介（1限目で行った自己紹介の続きという位置づけ）【15分】 自分のこと（昨日したことなど）について1文書いてもらったものを集め、ランダムにした後、順番に読んでもらい、誰が書いたのか当てる。		
II. 「なめらかな会話のために」 ①テキストの文を順番に読む。【10分】 ②ペアワークとしてテキストの穴埋めをする。【20分】 ③ペアワークの発表、答え合わせ。【15分】		

## 反省

I-②の自己紹介で、1文を書くのに5分弱使っていたが、冗長であったと、ビデオを見て感じた。早く書けた学習者は、時間を持て余しているようであった。同じようなものがII-②でもみられた。早く済んだペアは15分で十分であったようだが、実際は20分使っている。このようなことが起きた理由として、学習者の間で日本語レベルにかなりの差があり、それがペアになっても均等にならなかったことが挙げられる。

ペアワークで、20分使っても穴埋めが完成させることができなかつたペアについては、次のような特徴がある。学習者Hは事前インタビューではかなり流暢に話せていてレベルが高いと感じたが、授業では教師側が思っていたほどにはこなせず、またペアのもう1人である学習者Fは、ひらがなを読むことさえも難しいほどであったため、他のペアに遅れを取ってしまったようである。学習者の日本語レベルについては、授業が始まってすぐわかったことであるが、あからさまにペアを変える(HとFがペアになることが自然な席の形であった。)ことがその学習者にとっていいことなのかが分からなかつたため、この授業では何も対応ができなかつた。

教師の話す言葉については、学習者の日本語レベルを正確に掴みきれておらず、「～かどうか…」などの埋め込み文を用い、難しいと感じた。また時折、母語話者と話しているような早口であったりした。

2006年8月7日

3限目

担当：許惠雯

## 学習項目

- ◎ 誘う・約束する  
英語が話せない日本人を誘うときの表現を学ぶ
- ◎ 誘いを断る  
失礼にならないような断り方を学ぶ
- ◎ 約束を変更する  
変更するときの表現を学ぶ

## 授業の流れ

### I. 導入

「皆さんいつも日本人の友達と一緒に遊びに行くとき、どのように約束しますか？日本語で話しますか？英語で話しますか？」

### II. ①絵カードを使用し、状況を提示する

②絵カードの状況ではどのように友達を誘うかについて学習者からの話を聞く

③ペアになって誘い合ってもらう

④学習者から出た表現を板書し、確認したり訂正したりする

### III. 約束する・約束を断る

- ①学習者にテキストの会話文を読んでもらう
- ②テキストにある質問を一緒に考えていく
- ③テキストに書かれている誘いの表現と、自分が出した誘いの表現はどう違うかについて考えてもらい、その後全体で確認する
- ④誘いを断る表現を学ぶ

#### IV. 約束を変更する

- ①学習者にテキストの会話文を読んでもらう
- ②教師が会話文を読んでからリピートしてもらう
- ③会話文の内容について分からない箇所があるかどうか確認する
- ④テキストにある「れんしゅう」の部分をペアワークで記入してもらう
- ⑤完成した会話をペアで発表してもらう

#### V. 練習

- ①映画館や展覧などのチケットと自分のスケジュールが書かれた紙を配る
- ②ペアになってお互いに誘ってもらう
- ③自分のスケジュールを確認し、誘いを受けるか断るか自分で決めてもらう
- ④発表してもらう
- ⑤学習者の表現を確認したり訂正したりする

#### VI. ゲーム：ひらがなとカタカナで書いた数式を計算し、5秒以内で答えてもらう

\*目的：ひらがなとカタカナの練習及びリラックスすることを目的としている

#### VII. 約束を断る・変更する原因は病気である場合、病気の症状が言えるようになる目的とし、病気の症状の言い方を教える

反省

学習者が言い出した誘いの表現が「～ませんか」、「～しましょう」であったため、普通体に直そうとしたが、いきなり「友達の場合はどういいますか？」という質問を出したのは分かりにくかった。また、「場合」という単語も難しかったので、学習者は理解していないようであった。

テキストが読み終わって、いきなり「自分の誘い方とテキストの誘い方とはどう違うんですか？」と聞き、意味不明の質問になってしまった。学習者は理解していないように見えた。約束のとき、時間と場所を決めなければならないと教えるつもりであったが、進み方が悪かった。学習者は約束する手順が分からないのではなく、どのように日本語で言うか分からないだけなので、単純に時間と場所を約束する表現を指導すればよかったと思われる。また、テキストの会話文についての解説が少なく、ただ読んでもらうことだけで終わってしまった。クラスの中でも比較的レベルの高い学習者は会話の内容を理解したようだが、レベルの低い学習者は理解していないようであった。せっかくモデル会話を作ったのに十分に利用できなかった点を反省している。

テキストの「れんしゅう」は会話を完成させる練習である。会話文は2つしかないが、全員できるまでに15分もかかった。会話の内容と記入の仕方が分からないことが原因であるとビデオから観察できるため、書いてもらう前に「れんしゅう」の会話内容の確認と、何を書くかについての説明をするべきであった。

「はきけがする」と「げりをしている」という2つの病気の症状に対し、学習者から「どうしてはきけは「する」、げりは「している」という質問が出たが、すぐ答えることができなかった。それは教師自身の能力が不足であるため対応できなかったと痛感し、これからは自分の日本語能力及び教師能力をもっと高めなければいけないと深く反省している。

#### 4.3.7.2 2006年8月8日

2006年8月8日	1 限目	担当：許惠雯
学習項目		
「まちあわせ—いろんなトラブル！」 待ち合わせのとき、寝坊した、電車の切符を買い間違った、道に迷ったなどのトラブルにどのように対応するかについて学ぶ		
授業の流れ		

- I. 導入：昨日勉強した「約束する」を復習してから、今日は「約束の日のまちあわせ」についてと、起こったハプニングについて勉強することを提示
- II. 絵カードで場面を提示し、このような場面でどのように対応するか、どのように日本語で表現するかについて学ぶ
- ◎寝坊した場合
    - ①絵カードを示し、場面を提示する
    - ②寝坊したときどうしようと学習者に実際に演じてもらう
    - ③学習者の表現を板書で確認したり訂正したりする
  - ◎電車の切符を買い間違えた場合
    - ①絵カードを示し、場面を提示する
    - ②テキストのモデル会話を読む(教師が読み、その後リピートしてもらう)
    - ③「皆さんは切符を買い間違えた経験はありますか」と聞き、「そのときどうしましたか」とさらに詳しく聞いていく
    - ④ロールプレイ：学習者に一人一枚の買い間違えた切符を渡し、駅員に正しい切符を交換してもらうように指示する。教師が駅員の役割を演じる。
  - ◎道に迷った場合
    - ①絵カードを示し、場面を提示する
    - ②テキストのモデル会話を読む(教師が読み、その後リピートしてもらう)
    - ③モデル会話の表現と文型について説明する
    - ④練習：ペアで行う。一人に今見える景色の絵を配り、道に迷った人を演じてもらう。もう一人は地図を配り、道に迷った人は今いる場所が見える景色を聞いて、地図のどこにいるか答えてもらう。教師二人が先に見本を演じて見せる。
- III. ①テキストの「道を案内する」の練習をしてもらう
- ②答えあわせをする

反省

切符を買い間違えた場面の練習として、「間違えた切符を駅員に交換してもらおう」というロールプレイをしたが、実際の生活では、切符に交換してくれることは少ない（料金を払い戻して自ら再購入することが多い）ので、不自然であった。練習のデザインをするために、もっと日常生活を観察するべきであった。

道に迷った場合の練習では、教師二人が先に見本を演じて見せたが、思わずネイティブと話すようなしゃべり方をしてしまい、後でビデオを見るとかなり早口であったことに気づいた。学習者は気づきがよく、すぐ練習のやり方を理解したようであり、授業は順調に進んだが、初級レベルの学習者に対する語彙コントロールに気をつけるべきであった。

「道を案内する」ことについて、導入もなく説明もなく、いきなり「テキスト 14 ページの練習を書いてください」と指示した。練習する前に、「道を案内する」に必要とする語彙と表現を確認するべきであった。

2006年8月8日	2限目	担当：許恵雯
学習項目		
◎レストランでのハプニング レストランでハプニングがあったときの表現を学ぶ		
◎買い物する 店で欲しいものが見つからないときの対応の仕方と表現を学ぶ		
授業の流れ		
I. ウォーミングアップ 「みなさん朝ごはん食べてきましたか？」		
II. 「レストランでのハプニング」		
①ロールプレイ： →教室をレストランにする →教師が店員を演じ、学習者に注文を聞く →学習者に問題がある料理の絵を渡す →文句を言ってもらおう		
②「皆さんはレストランで今のようなハプニングにあったことありますか？」、 「そのときどうしますか？」と投げかけ、実体験について話し合う。		
③テキストのモデル会話を読む(教師が読み、その後リピートしてもらおう)		
④モデル会話の内容を解説する		
III. 「買い物する」		
①「皆さんはお店で欲しいものがない場合、どうしましょう？」と聞き、一緒に考えて		

いく

②テキストのモデル会話を読む(教師が読み、その後リピートしてもらう)

③モデル会話の内容を解説する

IV. ゲーム：ホワイトボードに単語を1つ書く。1名の学習者（以下A）はホワイトボードを背にして座る。他の学習者はボードに書かれた単語をAが当てることができるように、ヒントを順に出していく。

\*目的：発話を増やすためとリラックスするため

反省

レストランのロールプレイをした後、学習者が遭ったハプニングの経験とそれにどのように対応したかについて話し合い、テキストのモデル会話に移るといった流れであったが、ロールプレイのときの学習者の発話に対するフィードバックがなかった。どの表現が良かったか、どの表現がどのように変えたほうがよかったか、についてのフィードバックをしないと、ただロールプレイをするだけで終わることになってしまい、勉強にならないので改善すべき点である。また、モデル会話の文法と表現が難しすぎて、困難を感じている学習者が多くいたようであった。会話の内容を説明したが、学習者は事前に予想していたより日本語レベルが低かったため、説明しても困惑した表情をしていた。もっと分かりやすい言い方に変えるべきであったが、実習生自身の焦りもあり、よい対応ができなかった。

買い物するという学習項目を教えるときも同じ問題が起こった。学習者にモデル会話の内容を理解するように解説したが、学習者が分からないような顔を目の前に焦りが増し、うまく説明をしようとしたが、「問い合わせる」のような難しい語彙を次々に出してしまった。作成した教材にも少なからず問題があるが、最も大きな原因としては、実習生が教師としての自信と落ち着きさが足りなかったことが考えられる。今後、日本語教師としての経験を積み、より良い指導ができるようがんばりたい。

2006年8月8日

3限目

担当：中島忍

学習項目

◎返品する

買い間違えたもの、不良品を店に返品するときの表現を学ぶ

◎慣用句

日本語の慣用句を学ぶ

授業の流れ

I. ウォーミングアップ【2.5分】

「暑いのと寒いのとではどちらが好きですか」

<p>II. 学習項目：返品する（買い間違い、不良品）</p> <p>①導入：教師の買い間違えたエピソードを話す</p> <p>②学習者からの話を聞く：「みなさんは買い間違えたことありますか」</p> <p>③表現を一緒に考えていく：呼びかけ→説明→あいさつ【ここまで20分】</p> <p>④ペアワーク：不良品を手にしてしまったときの返品時の表現をペアで考える（テキスト使用）【9分】</p> <p>⑤ペア発表【8分】</p> <p>III. 慣用句：絵を見ながらそれに合うことばを選んで埋めていく。【30分】</p> <p>IV. ゲーム（円卓の席）：ことばで誰がどこ（誰の隣など）に座っているかを説明している文を読みながら、その通りに動物を並べていく。【20分】</p>
<p>反省</p> <p>買い間違えて返品するときの表現で、教師が用意した例文で、客の「あの一、返品したいんですけど…」という次のことばの、「どうなさいましたか」という店員のことばは少し不自然であった。</p> <p>学習者に作業をさせる際の指示が早口で、学習者が十分に理解していないようであった。</p> <p>また、客観的にみて、全体的に「教師のパフォーマンス」の多い授業という印象を受けた。教師が何かを提示して、学習者はそれを受け止めるという構図が多かったように思う。</p> <p>慣用句については、提示する数が多かったかもしれない。学習者は興味を持って取り組んでくれたが、日本語レベルが比較的低い学習者には少し困難であったように受け取れた。</p>

#### 4.3.7.3 2006年8月9日

2006年8月9日	1限目	担当：中島忍
<p>学習項目</p> <p>◎依頼する 依頼時の定型表現から、前置き表現まで学ぶ</p> <p>◎断る 角が立たない表現を学ぶ</p> <p>◎作文 最近（おもしろかったこと、悲しかったこと、怒ったことなど）を1文書く。</p>		

## 授業の流れ

### I. ウォーミングアップ【2.5分】

「昨日何時に寝ましたか」

### II. 学習項目：依頼する

- ①導入：ボールペンがないとき何と言う？【4.5分】
- ②ペアワーク：ペアでテキストの会話を完成させる【5分】
- ③発表：ペアワークで完成させた会話を発表する【4.5分】

### III. 学習項目：断る

- ①ペアワーク：ペアでテキストの会話を完成させる【9分】
- ②発表：ペアワークで完成させた会話を発表する【7分】
- ③ロールプレイ：配布した紙には自分が必要なものと持っているものが書かれている。自分の必要なものを借りられるまで他の人に聞く。自分が持っていないものを貸すように頼まれたときは角がたたないように断る。【11分】

### ☆リフレッシュタイム

「右（手）挙げて、左挙げて 左下げないで右下げて。」というものを行った。

### IV. 学習項目：作文【17分】

## 反省

本当に学習者のためとなった授業であったか疑問が残ってしまった点で反省している。学習者は、最低1年は日本で暮らしており、依頼表現は日常の生活でよく耳にし、或いは口にしているものである可能性が高い。実際、簡単な依頼の表現は、導入の時点で学習者から出てきた。それら学習者からの表現を、教師がただ単に受け止め、全員で確認するだけの作業が多かった。授業観てくださった鷺見先生からは授業後、「表現が学習者から出てきたなら、その他の言い方を提示すれば、その学習者も『学んだ』という気持ちになれるだろう」というアドバイスを頂いた。

授業3日目で学習者のレベルが分かってきたはずだが、教師の説明が早口で、語彙コントロールができていなかった点も反省すべきである。

2006年8月9日

2限目

担当：許惠雯

## 学習項目

「身近な紙を読む」

日常生活で必要となる最低限の読む力を身に付ける。看板とお知らせを中心に読むスキルを学ぶ。

## 授業の流れ

### I. 導入

「今日は読む練習をします」と授業内容を告知。

### II. 看板クイズ

- ①6枚の道路看板の写真をホワイトボードに貼り、どれが何を意味しているかを想像してもらう
- ②キーワードの英訳と6枚の写真の意味が書いてあるプリントを配る
- ③答え合わせ
- ④キーワードを探し出すことを指導する
- ⑤看板に書かれた日本語を解説する

### III. お知らせを読む

- ①導入:「アパートのメールボックスにあるお知らせなどを見て、皆さん読みますか? どうしますか?」
- ②お知らせの紙を示し、読める漢字や数字から何のお知らせか推測してもらう。
- ③四肢選択問題を利用し、お知らせにあるキーワードの漢字の読み方を確認する。
- ④漢字には音読みと訓読みがあることを示し、漢字の意味を指導する。漢字の形からでも意味が推測できることを教える。
- ⑤英訳の単語表を配り、お知らせの内容を読んで、何に注意しなければならないかを考えてもらう。
- ⑥答え合わせ

### IV. ゲーム: ぎりぎりヒント

ホワイトボードに単語を1つ書く。1名の学習者(以下A)はホワイトボードを背にして座る。他の学習者はボードに書かれた単語をAが当てることができないように、ぎりぎりヒントを順に出していく。

\*目的: 発話を増やすこととリラックスすること

## 反省

この授業は単語が多く、文法も難しかったので、下位レベルの学習者は少し付いていけない様子が見られた。幸い上位レベルの学習者がよく英語で通訳してくれたり解説してくれたりしたお蔭で、学習者全員が積極的に授業に参加してくれた。上位レベルの学習者がいなければ、授業の進行は難しかったであろう。実習生のみでも授業が進行できるように、媒介語の英語が使えるようになりたいと思う。直接法であれば、難しい単語や文法などを学習者に理解できるように、学習者の理解できる範囲の語彙と文法で説明できなければならない。経験の浅い教師の場合、事前に学習者のレベルをよく観察し、分からない単語や文法などを予測する訓練と、すぐ簡単な言い方に変えられるようになる訓練をしなければならないと反省した。

「看板クイズ」の練習では、プリントから読んで選ぶのではなく、発言してもらい、その意味を当ててみてもらうだけでよかったと思う。看板には絵や図などがあるので、意味が書かれている文書と組み合わせるだけでは簡単すぎた。「お知らせの注意事項は何を書いているか」という質問に対する答えを探し出す練習では、学習者はお知らせを精読してしまい、全部の意味を理解しようと文法に集中してしまったため、予定時間を大幅に超過してしまった。教師の指示がはっきりしていなかったこと、時間のコントロールができていなかった点を反省している。

2006年8月9日	3限目	担当：中島忍
学習項目		
<p>◎ちょっと一言！もんくを言う 禁煙席でタバコを吸っている、隣の部屋がうるさい、ヘッドホンから音が漏れているなどの状況で相手にどのように言うか。ダイレクトな言い方と柔らかい言い方を学ぶ。</p> <p>◎～そうです 友達に話をきいて、その話を「～そうです」を使って他の人に伝える。</p> <p>◎助詞すごろくゲーム すごろくのマス目に助詞が書かれている。さいころを振って進んだマス目に書かれている助詞を使って1文をつくる。</p>		
授業の流れ		
<p>I. ウォーミングアップ【2分】 午前の授業などでわからないところがあるかきく。</p> <p>II. 学習項目：もんくを言う</p> <p>①最近腹が立ったことがあるか聞く。【10分】</p> <p>②テキスト p35 の絵を見ながら、誰が何を言っているか、考える。【5分】</p> <p>③テキスト p34 の絵を見ながら、自分ならどのように言うかを考える。【8分】</p> <p>④自分の考えたもんくを発表【20分】</p> <p>III. 学習項目：～そうです</p> <p>①「いま何にはまっているか」、「夏休みなにををする（した）か」などについてまず自分のことを書く。【10分】</p> <p>②ペアになって相手に聞く。【7分】</p> <p>③ペアのことについて、発表（「～そうです」を使って。）【6分】</p> <p>IV. すごろくゲーム【60分】*延長した。</p>		

## 反省

改めてビデオをみると、学習者の質問に対する教師の答えがずれていることが多い。「自分の授業をすること」に必死であった。学習者の「？」にもっと敏感になって、どこが・なにが分からないか明確にさせてから、答えるようにしたい。

もんくを言うという学習項目をする意義が学習者に伝わっていなかったように思う。学習者はなぜこの項目を学ぶのかがはっきりしないまま授業に入っている。まず学習者から、腹が立ったエピソードを聞きだし、そのような時にどのように言うべきかということに基づいて授業を展開していくべきであった。1人に聞いているが不十分であった。

教師が予想していた答えと異なるものは無理やり直していることがあった。また、意識をしていないと思われるときに、早口になったり、難しい語彙などを使ったりしている。これらの点は常に意識し、改善していきたい。

### 4.3.7.4 2006年8月10日

2006年8月10日	1限目	担当：許恵雯
学習項目		
「私の好きなもの／宝物」 インタビューする・インタビューされる・英語をなるべく使わないでコミュニケーションする・発表の練習		
授業の流れ		
I. 前日の授業の復習 ①伝聞「N-だ/V-る/A-い+そうだ」の文法の復習 ②練習：AさんがBさんに質問する→AさんがCさんにBさんの答えを伝える		
II. 「私の好きなもの／宝物」の紹介 ①今日持ってきた自分の宝物を披露してもらう ②お互いに質問を考えて情報を引き出す練習をする		
III. インタビュー ①ペアでお互いにインタビューしてもらう。質問はテキストに書かれた質問3問+自分で考えた質問2問、最低5問を聞いてもらう ②インタビューした結果をテキストに作ったメモ欄にメモしてもらう		
IV. インタビューの結果発表： 伝聞の「そうだ」を使い、自分のメモを基に前に出てきて発表してもらう *サブ教師が先に発表の見本を見せる		

## 反省

授業後学習者は伝聞の「そうだ」を使うようになったので、学習者は伝聞の「そうだ」は理解したと思われるが、時間の都合で様態の「そうだ」に言及できずに終わったことが残念である。

インタビュー活動の際、教師は各ペアのところに回り、質問がある場合助けるようにした。学習者は自分が書いたメモに疑問がある場合や、聞きたい質問の言い方が分からない場合など、すぐに教師に助けを求めてきた。教師が意図した「インタビュー」の練習にはならなかったが、相手に興味をもって会話をつないでいくというコミュニケーションの目標は達成できたと思う。

発表の「今日私は〇〇さんにインタビューしました。今から〇〇さんの△△を紹介したいと思います」という発話は実際の日常生活に現れにくい内容であり、不自然である。しかし表現の練習という点から見ると、学習者たちはこの発表の練習をしてから、うまく伝聞の「そうだ」が使えるようになったので、この文法の意味と使い方は身に付けたと言えるであろう。

2006年8月10日

2限目

担当：許恵雯

## 学習項目

### 「聴解問題を解く練習」

日本語能力試験に向け、聴解の練習及び対策について学ぶ

## 授業の流れ

### I. ウォーミングアップ

「みなさん20歳の誕生日プレゼントは何ですか？」

\*備考：1限目の授業の話について少し話す

### II. 導入

「みなさんは日本語能力試験の聴解問題やったことありますか？」

### III. 日本語能力試験聴解の問題形式について説明する：

絵がある部分と絵がない部分という2種類があることを伝える

\*備考：今回は絵がない部分のみ練習する

### IV. テストする

### V. テープを聞きながら解説及び答え合わせをする

### VI. 聴解試験のテクニックについて話し合う

## 反省

今回の授業はコース開始後学習者から出た日本語能力試験について勉強したいという要望に急遽応えたものである。そのため、予定にはなかった能力試験対策を、決定していたシラバスを前日に変更して無理に組み込んだので、いろいろ準備不足のところがあった。特に以下の5点が挙げられる。

- ①平成10年度のテープしか手に入れられなかったが、対策用としては8年前のものでは古すぎると思われる。
- ②テープの早送りと巻き戻しが操作しにくく、時間をロスした。これは実習生が旧式のテープレコーダーの操作に不慣れだったためもある。
- ③絵がある部分のテキストが手に入らず、絵のない部分しか練習できなかった。日本語能力試験の練習としては不十分である。
- ④質問毎に対する答えを事前に確認していなかったため、授業中2人の教師が学習者と一緒にテストを受け、一緒に答えあわせをすることになってしまった。途中で2人の教師の答えがずれる場面もあった。
- ⑤テストが終わり、もう一度テープを聞き、その内容について板書で解説したが、学習者自身があとで自習できるように、テープ内容を文字起こしたものを渡すべきであったができなかった。

### 4.3.8 Bクラス全体の反省

コースが学習者のニーズやレディネスと、できる限りギャップの生じないように、事前インタビューを施し、実習生同士で何度も話し合い、目標やシラバスを立てた。しかし、コースが始まり、いざ学習者を目の前にしてみると、教師が捉えていた学習者のニーズやレディネスとは、一人ひとり少しずつ異なっていることに気がついた。そのため、授業終了後、コース前に立てていた教案を書き直したり、シラバス自体を直したりすることもあった。その甲斐あってか、授業後のアンケートでは学習者全員が満足を示す回答をしてくれたが、学習者のインタビュー内容を聞いて、その日本語能力を多少なりとも測り違えてしまったことは、教師側の経験不足、能力不足に起因すると考えられる。しかし、わずかに数分の事前インタビューで学習者の日本語レベルを推定することは、容易なことではない。かといって、これ以上、時間や労力を事前インタビューにかけられたかというところも難しいところである。

今回の実習は、4日間の短期集中で行われた。従って午前70分2コマ、午後90分1コマであったが、もう少しゆとりのあるスケジュールでもよかったと思う。授業内容やシラバスに多少の修正を加えることを念頭に入れておけば、時間的にも精神的にも余裕を持って軌道修正できたであろう。

また、1 コマの授業時間については、50 分から 60 分にするのが、学習者、特に初級レベルの学習者には負担が少ないと考える。

<報告担当 中島忍>

## 第5章 防災授業への取り組み

### 5.1 防災授業への取り組み

今回は新しい試みとして8月10日3時限の授業・オプションコースの連続で「防災授業」を取り入れた。日本で生活する上で必要となる知識は、言語や文化だけではない。本章は、生活基盤を日本におくALTにとって、日常生活の中で見過ごされがちである防災という重要な課題について、日本語教育実習の中での取り組みを述べるものである。

コースの中で防災授業は最終日の3コマ目で行った。2クラスの合同授業とした。授業ではそれぞれの学習者に防災への意識を高めてもらうことを目的とし、実際の地震のニュース報道などのDVDや防災グッズ、文字カードなど視覚的に訴えかける教材を作成し、活動中心の授業を行った。また、防災授業を通して学習者の意識がどのように変化したかを知るため、授業前と授業後にアンケートを行った。

#### 5.1.1 目的

本年度実習に参加した学習者は9名（出身国：アメリカ5名、カナダ2名、イギリス2名）であった。すでに1年以上日本に滞在しており、今後も日本に住み続ける可能性が高い人や配偶者やパートナーが日本人である人がほとんどであった。

例年、実習に参加する学習者は来日直後、初めて日本語を学ぶケースも少なくなかったため、日本の伝統文化を伝えるための授業が設けられていた。しかし、本年度参加の学習者は以前に実習に参加しており、日本文化については既に受講経験があった。

こうした学習者の背景を踏まえ、近い将来起こりうる東海地震に備え、正しい防災知識を伝えるとともに、防災に対する意識を高めてもらうという目的のもと、これらをコースに組み込んだ。具体的な活動内容として、1コマ90分の防災授業を私達が行い、さらに、外部の防災センターの体験コースに参加した。

### 5.2 具体的な取り組み

#### 5.2.1 事前準備

名古屋大学には災害対策室があり、東海地域と学内の防災力向上のために活動している。今回私達は防災授業をするにあたり、防災の基礎知識を学ぶために、この災害対策室の出

前講座に申し込み、2時間の災害対策講義を受けた。

そこで、外国人が災害時には情報や災害知識が少ないために災害弱者<sup>19</sup>になりうることを学んだ。外国の人は日本語能力のレベルにより情報弱者<sup>20</sup>になったり、地震が少ない地域の出身である場合、地震をイメージする力が弱くて備えを怠りがちになるという問題があることを知り、日頃からの防災教育の重要性を認識した。

こうした講義を踏まえ、災害対策講義で学んだ防災の目的「いのちをまもる」をテーマとして授業を組み立てることにした。さらに、実習生全員で授業の中で「何を・どのように」伝えることが必要であるかを話し合い、授業の流れを決定し、これに沿って資料の準備と教材の作成を行った。

### 5.2.2 防災授業：8月10(木)3限

防災授業は、日本語コース最終日の最後の時間に行った。クラスは上級クラスの4名と初級クラスの5名、計9名の合同授業にした。

説明は媒介語を用いず日本語で行ったが、上級クラスの学習者にとっても初めて聞く語彙が多いであろうことを考慮に入れ、文字カードを多用した。他に理解を助けるものとして視聴覚教材に災害記録のDVD（阪神淡路大震災の記録：①地震発生時のコンビニ映像②地震直後のニュース映像）を使用した。

授業を行うに際し、次の2点に留意した。

- (1)自分たちが受けた防災講義の単なるコピーとならないよう、単なる知識伝達ではなく防災の考え方を理解してもらおう授業を行う。
- (2)翌日に行く防災センターでの体験の理解を助ける前段階の授業にする。両者のつながりが意識できるようにする。

<担当内容>

許：撮影、資料提示

田中：授業担当

中島：授業副担当、資料提示

服部：機材管理、資料提示

---

<sup>19</sup>何らかの機能的障害のために、健常者として災害時の周囲の変化に迅速・的確な対応行動をとることができず、大きな被害を受ける可能性が高い人を言う。

<sup>20</sup>災害弱者の中で、日本語能力や情報遮断などの状態が原因で災害時情報を手に入れられない人、災害知識が乏しいための確な行動を取れない人を言う。

### 5.2.3 防災センターツアー：8月11日(金)

名古屋市港防災センター（名古屋市昭和区御器所通2丁目16番地の1）は、来館者に対する防災知識の普及と、その防災意識の高揚を図るための施設である。今回私達はこの施設の1時間半コースのツアーに学習者6名、実習生4名で参加した。各コーナーで防災指導員の説明を受けた後、「地震体験」「伊勢湾台風3D体験」「煙避難体験」の3つを体験した。

油圧駆動による起震装置で過去の大地震を再現する「地震体験室」は今回の防災学習の目的に合致するもので、参加者にも強烈な印象を残した。私達は2グループに分かれ、それぞれプレート境界型地震、直下型の地震を体験し、地震の恐ろしさを頭ではなく体で理解した。また、指導員の指示にしたがい、適切な初期行動の体験をした。これにより前日の講義で学んだことが実践できた。

また、他には電話で119に火事・けが人の通報をする練習や、実物消防ヘリの試乗をし、防災安心まちづくりコーナー、我が家の非常持出品、転倒防止金具等の展示を見学した。

### 5.3 学習者の反応

学習者の既有知識を把握し、防災に対する意識の変化をみるために8月7日のコース開始時と8月10日の防災授業の直後にアンケートを行った。また防災センターでの体験の後、学習者にインタビューを行った。以下にその結果を報告する。

#### 5.3.1 アンケート結果

##### 5.3.1.1 事前アンケート

まずは、コース初日に実施した事前アンケートの結果を次に挙げる。

#### 事前アンケート質問項目

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. あなたは今までに地震を経験したことがありますか。(ある/ない)</li><li>2. あると答えた方は、どのぐらいの揺れでしたか。<ol style="list-style-type: none"><li>a) 電灯がゆれるぐらい</li><li>b) 家具がガタガタと音を立てた</li></ol></li></ol> |
|---|

- c) 周りや地面がゆれているように感じて「めまいかな」と思った
  - d) 上からものが落ちてきた
  - e) 家具が倒れた
  - f) ガラスが割れた
  - g) 立っていられなかった
3. あると答えた方は、どこで地震を経験しましたか。
4. あると答えた方は、そのとき
- a) とても怖かった
  - b) あまり怖くなかった
  - c) その他
5. あなたの国では地震は多いですか。
- a) 多い
  - b) たまにある
  - c) めったにない
  - d) ない
6. 日本は地震の多い国ですが、次の地震について聞いたことがありますか。
- a) 新潟中越地震 2004年10月23日
  - b) 阪神淡路大震災 1995年1月17日
  - c) 鳥取県西部地震 2000年10月6日
7. 大きな地震が起きたときに、まっさきに何をしますか。
8. 非難場所を知っていますか。
- a) 住んでいるところの避難場所
  - b) 職場の避難場所
9. 地震に備えて
- a) 買い置きしてあるものが (ある/ない)
  - b) 家族と連絡の取り方を決めて (ある/ない)
  - c) 災害伝言ダイヤルを (知っている/試したことがある/知らない)

表 11 事前アンケート結果

	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9
1. 地震体験の有無	有	有	有	有	有	有	無	有	有
2. level	2	6弱	3	1	1,2,3	3		1,2,3	2,3,4
3. 地震を体験した場所	日本(東海) 自国(Vancouver)	自国(サンフランシスコ)	日本(東海)	日本(東海)	日本(東海)	日本(東海)		日本(関西) 自国(Vancouver)	日本(東海)
4. 地震時の体験について	ちょっと怖かった	あまり怖く なかった	とても怖かった	あまり怖く なかった	とても怖かった	少し怖かった		わくわくした	とても怖かった
5. 自国での地震の発生頻度	たまにある	たまにある	めったにない	たまにある/ない	めったにない	たまにある	ない	たまにある	ない
6. 日本の地震で聞いたことがあるもの	・新潟 ・阪神	・阪神	・新潟 ・阪神	・阪神	・新潟 ・阪神	・阪神			・新潟 ・阪神
7. 大地震発生時の行動	S1: Duck, take cover, evacuate S2: テーブルの下に行ってあたまをまもる。 S3: テーブルの下に行きます。 S4: 何もしない。 S5: Protect my family, Secure emergency supplies, Open doors. etc. S6: まだわからない。(Stand under doorway) S7: Find something to hide ***. S8: Run under doorway and stand there., Outside to open field., Away from power lines., etc. S9: じしんのかばんもって行きます、(避難場所の)こうえんへいく。								
8-a 避難場所/住んでいる所	知らない	知らない	知らない	知っている	知っている	知らない	知らない	知らない	知っている
8-b 避難場所/職場	知らない	知らない	知らない	知っている		知らない	知らない		
9-a 買い置きの有無	S1: ラジオ 水 カン 懐中電灯 ろうそく 食べ物 下着類 S2: 無 S3: 無 S4: 有 S5: 2backpacks(Water, Food, Shelter, etc) S6: 無 S7: 無 S8: Water/Keitai S9: 水								

	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9
9-b 連絡方法	S1: 決めていない S2: <空欄> S3: 電話を使う S4: 決めていない S5: 決めてある S6: 決めていない S7: 決めていない S8: KEITAI/INTERNET S9: 決めていない								
9-c 災害伝言 ダイヤル	112,119 .171	知らない	知らない	知らない	以前 試した	知らない	知らない	知らない	知らない

### 5.3.1.2 事後アンケート

次に4日目の3限A・B合同授業である防災授業終了後に行った事後アンケートの結果を次に挙げる。

#### 授業後アンケート質問項目

1. 大きな地震が起きたときに、まっさきに何をしますか。
2. 今日の授業ではじめて聞いたことはありましたか。(ない/ある)
3. これまでに自分が思っていたことと違うことは何かありましたか。(ない/ある)
4. 今日の授業は役に立ちましたか。(Agree:5 ⇔Disagree:1)
5. 何が役に立ったか、具体的に書いてください。

表 12 授業後アンケート結果

	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9
1. 初期行動	S1: いのちとくらしを守る DCH、避難する S2: D C H S3: テーブルの下に入いて、あたまに注意する S4: Duck, Cover, Hold S5: Duck, Cover, Hold S6: D C H S7: Duck, Cover & Hold S8: Duck, Cover, Hold S9: <空欄>								

	S1	S2	S3	S4	S5	S6	S7	S8	S9
2. 授業で 初めて 聞いたこと	S1: 死因の第一位、防災袋に入るべき物、防災のダイヤル S2: 171 のこと S3: 171 のこと、どんな原因で人が地震の時新でしまうか S4: 無 S5: 無 S6: All of it. S7: Yes, All. S8: Yes, most S9: NTT emergency dial / cause of death in earthquake / what to put in BOUSAI-bag/2035+15 ,2035-15 / self-help, mutual assistance, government assistance/how to use wrap / how to use whitsle / tsuppari-bou / others								
3. 自分の認識 との相違点	S1: 無 S2: 圧死の方が焼死より多いということ S3: 無 S4: 無 S5: 無 S6: 無 S7: A l little different, surprised of what to do put in the emergency pack. /And the 171 number sounds like a good idea S8: More things into emergency bag S9: Yes, a little								
4.役立ち度 (最高 5)	5	4	5	5	5	5	5	5	5
5. 上記 4 に ついて 具体的に	S1: 防災袋、防災のダイヤル S2: 171、防災袋 S3: Emargency kit の内容、171 の使い方 S4: 持ち物、防災の番号 S5: 171 information S6: 防災 information S7: Stuff to *** (解読不能)、Stuff to do - like phone 171 S8: Every thing S9: I have prepared for an earthquake as the Niigata earthquake a few years ago scared me, but there are always new things to learn								

### 5.3.2 考察

以上 2 つのアンケートを基に考察を行う。事前アンケートの結果からは、ほとんどの学習者が日本でのみ地震を経験しており、自国ではあまり地震は起きないということが分かった。ある学習者（イギリス出身）は自国でも日本でも地震の経験はないと答えていた。

このことから今回の学習者の地震災害についての情報の不確かさや少なさが予測された。

また、事前アンケートの際に防災袋を常備していないと回答した学習者は約半数いたが、授業後アンケートにおいて防災袋に入れておくべきものの情報が役に立ったという学習者が複数いたことから、防災袋の常備に対する意識を上げることができたと思われる。

大地震が起きたときにまず何をするかという問いに対しては、コース開始時の事前アンケートでは「わからない」と答える学習者がいる一方で多くの行動を羅列した学習者がいたが、授業後アンケートでは全員が“Duck, Cover, Hold”と基本的な初期行動を書くことができた。

さらに、事前アンケートでは、災害時に家族と連絡が取りにくいという点に関してはあまり意識されていなかったようであるが、授業後アンケートにおいては災害伝言ダイヤルについてのインフォメーションが役に立ったという学習者が多くいたことから、今後家族や友人と災害時の連絡方法を話し合うきっかけになったと考えられる。

### 5.3.3 防災センター見学後インタビュー

防災センターの見学終了後に参加した学習者全員にインタビューを行った。インタビューは IC レコーダーを用いて録音を行った。インタビューではある学習者から「ただ授業なしでここに一人で来たら多分あんまり分からないと思うから、来る前に授業があつてよかったです。」といった声が聞かれた。こうした声からも、私たちの授業と防災センターでの体験が関連付けられたといえる。

また「(地震体験室などでの経験が) 今後役に立ちそう」などの体験に対する感想の他、「甥や姪をつれてまた来ます」、「(外国人の) 友達ともう一度来たい」といった学習者の言葉からも、防災センターでの体験が学習者にとって意義のあるものになったことがうかがわれた。

## 5.4 まとめ

アンケートとインタビューの結果を見ると、学習者の今回の防災授業に対する評価は「役に立った」、「面白かった」、「勉強になった」と肯定的であった。しかし、日本語力に差があるクラスでは講義内容・アンケート意図を正確に伝えるためには媒介語である英語も使用するべきであった。

また、90分という制限があり、災害に対する備えに焦点をあてた授業内容になったが、震度6以上の地震が起きた後に起こりうる避難所生活に関する知識についても言及することができれば、よりよい授業になったのではないかと思われる。

地震国日本において備えておくべき防災知識を日本で生活する外国人に教え、彼らが災害弱者になる危険性を極力減らすことの重要性は大きい。このような取り組みはすでにくつかの機関で実施されてはいるが、情報が共有化されているとは言いがたい。今後日本語教育機関はもちろん、企業や地域など、外国人を受け入れる側のネットワーク作りの促進と防災教育の組織的な計画・実施が望まれるだろう。今回こうした取り組みを教育実習の中で行ったことには大きな意義があったと思われる。

＜報告担当 服部明子＞

※本章は 2006 年 9 月 23 日に本実習グループが仙台国際センターにおける『日本語教育方法研究会』で発表した資料を基にしている。

#### 参考資料

『20 世紀日本の地震災害』(H15) 日本気象協会

『あっ、地震だ！どうする？－日本語学習者のための地震防災マニュアル（2006 改訂版）』

日本語教育の「八の会」

名古屋大学災害対策室

<http://anshin.sharaku.nuac.nagoya-u.ac.jp/taisaku/>

名古屋市港防災センター

<http://www.nagoya-dpmc.jp/bousai/index.html>

災害伝言ダイヤル 171

<http://www.ntt-west.co.jp/dengon/intro/index.html>

## 第6章 事後アンケート

### 6.1 事後アンケート結果

コース最終日に、実習生各自の課題を認識し、次年度に役立てるため、コース終了後に事後アンケートを行った<sup>21</sup>。以下に、事後アンケートの結果を示す<sup>22</sup>。

#### 1. 授業について

##### 1) 内容

	満足	不満足
Aクラス	4	0
Bクラス	4	0

##### 2) 役に立ったもの (自由回答)

Aクラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ スピーチの作戦、ことわざ、ディスカッションの作戦</li> <li>・ スピーチ、ディベート</li> <li>・ いい発表の練習</li> <li>・ 討論とスピーチと防災</li> </ul>
Bクラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ listening comprehension(3kyuu)</li> <li>・ smooth taking, practical game</li> <li>・ idioms everything!</li> <li>・ I like to complain, &amp; interesting.</li> <li>・ HAI, I learned a <u>lot</u>!!</li> <li>・ listening comprehension(3kyuu), smooth talking, particle game, idioms everything!!</li> </ul>

##### 3) 役に立たなかったもの (自由回答)

Aクラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 役に立たなかったものはないです。</li> <li>・ Useful 全部役に立つ</li> <li>・ ことわざ(でもおもしろかった)</li> <li>・ ディスカッションはちょっと多かったと思います。</li> </ul>
Bクラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ I can use everything</li> <li>・ No, it was all good.</li> </ul>

<sup>21</sup> 1名は時間の都合で無回答であった。

<sup>22</sup> 自由記述の回答については学習者の表記をそのまま用いている。

4) もっと勉強したかったこと (自由回答)

A クラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>敬語、方言、漢字</li> <li>ない</li> <li>完璧だよ。</li> </ul>
B クラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>Physical demonstration</li> <li>Something Kanji?</li> <li>3 kyuu practice, grammar practice</li> </ul>

2. 教材について

1) テキストの量

	多い	ちょうどいい	少ない
A クラス	1※	2	0
B クラス	0	4	0

◇自由回答

「テキストの量はいっぱいだったけど、全部同じテーマだったから分かりやすかった。しかもこれから自分で勉強できます。満足です」

2) 内容

	満足	不満足
A クラス	4	0
B クラス	4	0

◇自由回答

A クラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>例が便利、作戦が便利</li> <li>でもあまり使わなかった。</li> <li>勉強したものはすごいおもしろい</li> </ul>
B クラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>Was it an expresses goal to teach praimarily casual speech Its OKAY, I just don't know.</li> </ul>

3) コースの期間

	長い	ちょうどいい	短い
A クラス	0	4	0
B クラス	1	3	0

◇自由回答

<Bクラス>

- Maybe A couple more days (2-3) would be nice.(Because I'm leaning a lot)

4) 費用

	高い	ちょうどいい	安い
Aクラス	0	0	4
Bクラス <sup>23</sup>	0	1	4

5) クラスのレベル

	自分には簡単すぎた	合っていた	自分には難しすぎた
Aクラス	1	2	0
Bクラス <sup>24</sup>	2	4	2

◇自由回答

Aクラス	1名自由回答：難しかったけど、そのほうが一番いい
Bクラス	• It was challenging, But not too high. If helped a lot when the SENSEIS wrote the text in ROMAJI for me. SUGOI YASASHI! It helped me read fast as my classmates. THANK YOU.

6) クラス人数

	多い	ちょうどいい	少ない
Aクラス	0	3	1
Bクラス	0	3	1

7) 教師

	満足	不満足
Aクラス	4	0
Bクラス	4	0

◇自由回答

Bクラス	• I was challenged, but the senseis made sure I could understand before continuing.
------	---

<sup>23</sup> Bクラス 4名中 1名回答重複

<sup>24</sup> Bクラス 4名中 4名回答重複。

B クラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Very good. Nice friendly.</li> </ul>
-------	---

3. 参加する前に期待していたことと違ったことはありますか。(自由回答)

A クラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>• こんなに会話が多いと思わなかった。</li> <li>• 思ったより難しかった。よかったと思う。</li> <li>• いいえ。去年のクラスを受けたから楽しみにしていた。</li> <li>• 期待していなかった。</li> </ul>
B クラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Yes, Course was better than expected.</li> <li>• Not so much, I was the level would be too easy.</li> <li>• Yes, it was difficult. I thought it would be more grammar focused. But grammar was not really taught at all. For me it was OK, because I had already learned most of the grammar used. But for others, I think it was difficult to understand the reason why certain grammar is used. Some grammar background may be useful next time.</li> </ul>

4. 来年もコースがあれば参加したいですか。(自由回答)

A クラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>• よろしくお願ひします。</li> <li>• 日本にいたら、参加したい。</li> <li>• 日本にいたらぜひ！</li> <li>• 来年もコースがあれば参加したいです。</li> </ul>
B クラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>• Yes</li> <li>• Yes, it possible</li> <li>• No because I'll be in England, but if I was here, I would.</li> <li>• Yes, I would join.</li> </ul>

5. その他 (自由回答)

A クラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ありがとうございます。お世話になりました。</li> <li>• よくスケジュールの時間に守らなかったけど、そのこと以外は本当によかったです。ありがとうございます！</li> <li>• 今年の授業はすごい役に立った。発表の練習大切。前、私の発表は足りなかった。この機会をありがとうございました。</li> </ul>
-------	--

B クラス	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ ありがとう!!!!楽しかった！</li> <li>・ Interesting and fun course!</li> <li>・ The games were great! Also, I enjoyed the ‘Monku’ lesson and the idiom lessons.</li> </ul>
-------	---

## 6.2 まとめと反省

事後アンケートでは、参加した学習者から高い評価が得られたことが分かる。また、学習者全員が、何らかの学習項目に対し、「役に立つ」と回答したことから、本実習のコースの目的が達成されたと判断することができるだろう。また、全員が可能な状況にあれば次年度もコースに参加したいと述べたことから、本実習のコース運営が概ね成功であったといえると思われる。しかし、さらに学習したかった項目や改善するとよい点などについては、それらの意見を実習生各自が真摯に受け止め、今後もよりよい日本語教育を目指していく必要があるだろう。

最後に、事後アンケート実施の際の反省として、英語を媒介語として用いる必要があったという点を挙げる。事後アンケートは日本語で行ったが、Bクラスの学習者が質問内容を誤解するという事態が起こったため、英語を併記したものを使用すべきであった。学習者からの貴重なフィードバックを得るためには、実習生側が事前に十分な準備を行う必要があった。

＜報告担当 服部明子＞

## 第7章 まとめ

夏季教育実習は『2006年度日本語教授法および実習』受講生による長期に渡る取り組みの集大成である。本実習は参加者の募集からニーズ調査にはじまり、学習目標の設定、シラバスデザイン、実習の実施、運営、報告ページのまとめにいたるまで1年次の授業、春季実習、前期授業で学んだことを実践すべく行った。

実習生4名は国内外での日本語教育経験の有無、日本語母語話者、中国語母語話者というそれぞれの属性や得意分野を生かし、お互いに忌憚のない意見を交換し、補い合いながら日本語教育に正面から取り組み、授業を作り上げることができた。5章に詳細を記した防災授業も綿密なシラバス設計の話し合いから生まれてきたものであることを繰り返しておきたい。事前調査の結果を分析した後、例年行ってきた文化の授業を設けるのではなく、来るべき東海大地震に備えて防災授業を実習に取り入れるという決断ができたのも、真剣な話し合いの結果であったと言えよう。

各章で述べてきたように反省、改善すべき点は多々あるが、実習を通して自身の課題や日本語教育のあり方を再考する貴重な機会を得るとともに、個性あるメンバーで、切磋琢磨しながら実習できたことを幸運に思う。また、今後、実際に様々な機関で日本語教育に携わる上で、立場や母語の違う教師がお互いを尊重し協力するために個々がどう関わっていくべきかということの学びの機会になったのではないかと思われる。

最後に、夏季実習を行うにあたって多大なご協力をいただいた名古屋市教育委員会、株式会社アルティアセントラル、コスモグローバルコミュニケーションズスクールの担当者の方々、高い学習意欲、積極的な授業への参加で実習を意義あるものにしてくださった実習参加者のALTの皆様、実習実現の各段階でご協力いただいた名古屋大学関係各位、そして実習生を指導、支えてくださった本専攻の鷺見幸美助教授に心から感謝しお礼を申し上げます結びとしたい。

2007年3月

実習生一同